西域出土法華章疏の基礎的研究

金炳坤
(身延山大学特任講師, 立正大学非常勤講師)

국문요약

본 논문은 서역에서 출토된 법화장소의 기초적 연구로, 본 연구분야의 방향성을 제시하고자 세계 각국에서 소장중인 서역출토 자료들를 종합적으로 검토 후, 이 중 법화장소가 134점 확인되고 있음을 밝히고 있다.

본 연구분야는 연구자료가 사본이라고 하는 특성상 비교적 연구에 평이한, 활자화 되거나 데이타베이스화 되어진 자료등을 바탕으로 연구가 진행되어 왔으며, 그 중심엔 『대정신수대장경』수록본이 자리하고 있었다.

『대정신수대장경』 제 85권의 고일부(古逸部)에는 돈황에서 출토된 5종(Nos. 2748-2752) 6점(S. 2733, S .4102, S. 4107, S. 2463, S. 2439, S. 2662)의 법화장서가 수록되어 있다. 본 논문에서는, 상기의 5종 6점

불교학리뷰 (Critical Review for Buddhist Studies)
13권 (2013. 6) 55p~111p

에 관한 종래의 연구현황을 총괄하고 있으며, 특히 오랫동안 산일된 것으로 알려져 있던, 최근 필자에 의해 재조명 되어진 기국사(紀國寺) 혜정(慧淨)의『묘법연화경찬술』과의 관련성에 대해서 논구하구 있다.

본 논문에서 논급하는 법화장소를 일괄하면 하기와 같으며,

I. S. 2733 및 S. 4102, 참조 BD06199 (淡3)

II. S. 4107, 참조 BD06198 (菜11)

III. S. 2463, 참조 BD06199 (淡32), S. 113v

IV. S. 2439, 참조 BD06196 (暑70), P. ch. 4567, BD06197 (玉26), P. ch. 3308

V. S. 2662

이 중 본 논문에서는 상기의 II와 V가『묘법연화경찬술』과 관련성이 깊은 것을 밝혀내고 있다. 참고로『묘법연화경찬술』은 현재까지 이하의 3점(국내 2점, 돈황 1점)이 발견되었으며,

1) 보물 206호. (서품)

2) 보물 1468-4호. (비유품~수기품)

3) BD06202 (致15). (서품)

『묘법연화경찬술』의 소출로는 하기의 2점을 확인 할 수 있다.

1) S. 6494 (서품~비유품)

2) S. 4107 (여래수량품~상불경보살품)

9세기 이후의 중국에 있어,『법화경』의 4대주석가의 한 사람으로 손꼽히던 혜정, 그리고 그의 저서『묘법연화경찬술』은 7세기 이후에 성립된『법화경』주석서에 큰 영향을 미치고 있으나, 아직까지 이에대한 연구가 전무한 편으로 향후 지속적인 연구가 이루어져야 될 것이다.

주제어 : 고일부, 혜정, 서복,『묘법연화경찬술』,『법화의기』, 일경사단

1. 古逸部収録本について

未だ曾て世に伝えられなかったもの、古記録にその書名があっても今日散逸して伝わらないもの、既に伝えられて居るものでも古い写本で文句の異なっているもの、及び稀覯の文献[1)]。

以上の四つの基準を以て1925年までに矢吹慶輝博士によって日本にもたらされた西域出土文献は、その後さらに選別され、1932年には『大正新脩大藏經』(以下、『大正蔵』)第85巻に収められるようになった。

ただし、そのうち古逸部に収録されている以下の五種六本(【表１】)の法華章疏については、対比しうる文献資料の不十分さゆえに、研究を進展させる糸口をつかめずに膠着した状態が続いていたのである。

しかし、近年筆者によって明らかとなった紀国寺慧淨(CE.578−645?)の『妙法蓮華經纘述[2)]』(以下、『纘述』)の存在により、本研究分野に対する新たな試みができるようになったのである。

1) (矢吹慶輝[1932]pp.3−4)参照。

2) (拙稿[2010]・[2011]・[2012b])、(吉村誠, 山口弘江[2012]p.76, p.273註108)参照。

【表１】『大正蔵』古逸部収録法華章疏五種六本の概要

略語	『大正蔵』(T.85)	原本	総行数	在品	推定年代[3]
I①	No.2748 170a05−176c17	S.2733	293	薬草品～勧持品	508年写訖
I②	No.2748 172a20−179c28	S.4102	408	化城品～踊出品	6世紀初期
II	No.2749 180a05−189b20	S.4107	512	寿量品～不軽品	7世紀
III	No.2750 189b26−194c01	S.2463	247	随喜品～普賢品	6世紀
IV	No.2751 194c07−199a12	S.2439	240	神力品～普賢品	6世紀初期
V	No.2752 199a18−205b05	S.2662	373	前後103番の問答	7・8世紀

『大正蔵』ではI②とIIの原本をそれぞれ[S.37](識語：妙法蓮華経信解品第四)、[S.520](識語：報恩寺方等道場[場] 牓)とするが、それは『鳴沙餘韻解説』(以下、『解説』)に示されたスタイン本の番号(矢吹慶輝[1931]の未整理旧番号)をそのまま踏襲したことによる誤りで、正しくは【表１】のとおりである。なお、『解説』(p.97)に『法華論』の原本を[S.2502](『仁王經疏』(仮題)・T.85 No.2745)とするのも矢吹慶輝[1931]の

3)【表１】の推定年代は、直に資料に触れているか、又は当該分野の権威と称される以下の先達(矢吹慶輝[1932・1933]、Lionel Giles[1957]、藤枝晃[1959−1963]、兜木正亨[1978])の見解(【表２】)に基づいたものである。

【表２】『大正蔵』古逸部収録法華章疏に対する先達の推定年代一覧

略語	原本	矢吹慶輝	Lionel Giles	藤枝晃	兜木正亨
I②	S.4102	北魏	early 6th cent	6世紀前半	六世紀
II	S.4107	唐	7th cent	×	初唐
III	S.2463	六朝	6th cent	5世紀	六世紀
IV	S.2439	六朝時代	early 6th cent	×	六世紀
V	S.2662	中唐以後	−	×	初唐

未整理旧番号を指すもので、正しくは[S.2504]である。

本稿ではこれまであまり注目されてこなかった上記の六本に対する従来の研究成果を概略し、それに新たな成果を加えるべく、新出史料『纘述』との対比を中心に、その関連性が窺われるIIとVの二本のうち、とりわけIIについて詳述する。

2. 古逸部収録本の研究史

曾て藤枝晃博士はこれらの研究史について、「2748−2752 法華經関係注疏　すでに矢吹博士が捜集して≪鳴沙餘韻≫pls.25−33に書影を揚げ、≪同解説≫pp.94−107に夫々の特徴乃至古逸未傳として注意すべき点を指摘するが、その後これらに関する研究の著しいものを聞かないので、こゝに附加すべきことはすくない。」(藤枝晃[1959−1963][4])との見解を示された。

あれから半世紀を経た現在では、当該分野の体表的な研究者として、日本では16本の関連論考[1977−2000]において47点の西域出土法華章疏について論及する、平井宥慶教授による総合的な研究がなされており、中国では方廣錩博士による4種6本の関連論著[1996−1998]において55点の敦煌出土法華章疏に対する概論的(1点の翻刻を含む)な研究が行われている。そしてこれらのなかに古逸部収録本も網羅されている。

4) 本資料は(平井宥慶[1978a]p.803注9・[1978b]p.123註(10)・[1979]p.277註1・2)に引用・言及されているが未公刊である。筆者は京都大学人文科学研究所附属東アジア人文情報学研究センターの梶浦晋助手の私物を立正大学の手島一真博士を経由して閲覧することができた。ここに記して深く感謝申し上げたい。

ただし、筆者の現在までの研究によれば、西域出土文献のなかに**法華章疏は134点**(点数は真贋を問わない現段階における暫定的な数字であり、今後の研究次第では増減が予測される)を数えることができる[5)]。

したがって以下では、矢吹慶輝博士、平井宥慶教授、方廣錩博士の研究成果を中心に、これを検証しながらその特筆すべき点について論述する。

2-1. I. ①[S.2733]・②[S.4102]・『法華義記巻第三』(T.85 No.2748)

(矢吹慶輝[1932]pp.25-27)、『解説』(pp.94-97)、(平井宥慶[1978b]pp.108-113・[1993]pp.644-650)、(方廣錩[1998F]p.48)に詳しい。

①の識語[6)]は「受(ママ)記品、化城喩品、第四五百弟子受記品、授学無学人記品、法師品、見宝塔品、持品、比丘**惠業**許 / **正始五年**(CE.508)五月十日釋**道周**所集在中原廣徳寺**寫**訖(奥書は本文とは異なる筆跡)」があり、②は「五百弟子受記品、授学無学人記品、法師品第十、見宝塔品、**持品第十二**、安楽行品、従地踊出品、**法花義記第三** 比丘**法順**[7)]**寫**記也」がある。I①とI②の重なる五品半の内容が過不足なく合致するため、同疏の別人による異写であることが判る。

本疏は「見宝塔品」と「持品」の間に「提婆達多品」(490年法意訳[8)])を欠いており、道生疏や法雲疏のように訳出当初の27品体裁の『妙法蓮華

5) 詳しくは、〈付録Ⅰ～Ⅴ〉を参照されたい。
6) 識語は原則として写本のとおりに記した。以下同様。
7) 法順については詳細不明であるが、敦煌の金光明寺の法順が知られている。[P.2250v](『宝蔵』118, p.78b)参照。
8) 「提婆達多品」と「普門品重頌偈」の訳出年時については、(野村耀昌[1965]pp.115-120)、(兜木正亨[1978]pp.234-236)参照。

經』を底本とする。508年以前に成立した古逸疏にして「法雲疏をやや遡る時代の成立」(菅野博史[1991]p.46)と推定されている。その巻数について『解説』(pp.94−95)には「道生の『法華經疏』二巻、法雲の『法華義記』八巻より類推するに、本『義記』は凡そ四巻[9]を以て完結せるものの如し。」とあるが、(佐藤哲英[1981]pp.274−275)には「全部揃っていたら五巻乃至七巻の著作であったと考えられる。」とある。(矢吹慶輝[1932]p.26)には「道生、法雲、吉藏、智顗の諸疏と對照したが全く符合しない。」とある。その抄訳(「薬草喩品」の後半偈部、「受(ママ)記品」・「法師品」の全訳)が存し(平井宥慶[1992a])、法雲疏との比較研究がある(菅野博史[1991])。

ことに他疏との関係において注目すべき点は、(平井宥慶[1993]p.650)に「羅什系譜に入る注釈本」、「法雲疏より早い成立と思われる」と推定されている**[淡32]**(「信解品」〜「授記品」)との関連性であり、[淡32]の「薬草喩品」の後半にある偈文の科段釈が、I①のそれと同一であることが指摘されている(平井宥慶[1978b]pp.109−111)。これも抄訳(「薬草喩品」の後半偈部、「授記品」の全訳)が存する(平井宥慶[1992b])。

2−2. II. [S.4107]・『法華經疏』(T.85 No.2749)

『解説』(p.102)、(平井宥慶[1977c]pp.64−65・[1991])、(方廣錩[1998F]p.46)に詳しい。

---

9) 慧皎(CE.497−554)撰(CE.529)『高僧傳』巻第六に「釋曇影。或云**北人**。……什後出妙法華經。影既舊所命宗。特加深思。乃著法華義疏四卷。并注中論。」(T.50 no.2059 p.364a, *ll.* 10−11)とあり、羅什の訳経を助けたとされる曇影に『法華義疏』四巻の著あることが知られている。引用文中、**太字**及び下線は筆者による。以下同様。

識語は「分別功徳品第十七、隨喜功徳品第十八、法師功徳品第十九、常不軽菩薩品第廿」がある。

『解説』に「現存諸法華疏中、唐窺基の玄贊に近似するも、分科其の他に於いて全く異疏たるを知る。」とある。

ところで慈恩基の『妙法蓮華經玄贊』(以下、『玄贊』)に先行する法華疏に『纘述』があり、その一部(「序品」、「譬喩品」～「授記品」)が韓国に刊本として四巻が現存する[10]。「化城喩品」以下は散逸したが、栖復(CE.-879-)の『法華經玄贊要集[11]』(以下、『要集』)に「紀國云」と彼の逸文が散見されるため、これをもとにIIと対比しうることができる。

結論からいうと、『要集』の該当箇所に見られる「紀國(云)」の15例(含、又云・名のみ)のうち、13例が本疏において一致或いは類似することが確認できた。『纘述』と[S.4107]との関連性については、3. において詳述する。

---

10) 詳しくは、(拙稿[2010]pp.124-128)を参照されたい。

11) 「法華經玄贊要集 ❶(日)Ho-ke-kyō-gen-zan-yō-shū.(支)Fa-hua-ching-hsüan-tsan-yao-chi. 法華鏡水鈔、法華玄贊要集 ❷三十五卷(卷二二、二三、三〇、三二缺) ❸存、卍續一・五三・三-五四・五 ❹唐栖復集 ❻本書は慈恩大師の法華玄贊十卷を更に栖復が講筵に侍して聽きて註釋疏記せるものにして、三乘教に立脚して一乘教を批判解説せるものである。内容は第一卷に法華經本來前後十六譯の存せるを明し、次に題目を釋し、次に玄贊の序文を釋し、次に六門分別せる所以を釋す。第二卷には第一敍經起之意門を釋し、第三卷第四卷に第二明經之宗旨門を釋し，第五卷に第三解經品得名、第四顯經品廢立門、第五彰品之次第門を釋し、第六卷より第十四卷に至る第六釋經本文門に入りて序品を釋し、第十五卷より第二十一卷に至る方便品を釋し、第二十二卷、第二十三卷は散佚して傳はらず。第二十四卷、第二十五卷には譬喩品、第二十六卷には信解品、第二十七卷には藥草喩品、第二十八卷第二十九卷には授記品・化城喩品、第三十卷は散佚し、第二十一卷には五百弟子授記品・人記品・法師品・寶塔品を釋し、第三十二卷は散佚し、**第三十三卷**には安樂行品・涌出品・**壽量品**、**第三十四卷**には**分別功德品・隨喜功德品・法師功德品・不輕品**・神力品・囑累品・藥王品・第三十五卷は妙音品・觀世音品・陀羅尼品・嚴王品・普賢品・勸發品を釋せるものである。(橋本凝胤)」(『佛解』10，p.32d)参照。

要するに[S.4107]は『纘述』を適宜に抄出している[S.6494[12]](「序品」～「譬喩品」)のケースと同様『纘述』の抄出(ただし抄出態度については今後の研究を俟たねばならない)か、又は『纘述』の影響を受けていることが判明したのである。

また平井宥慶教授は**[菜11]**(「寿量品」～「普門品」)との関係について「両本は明瞭に別本であるにもかかわらず、同一釈文が散見される」と指摘し、その成立を[菜11]→[S.4107]→『玄贊』の順に推定したが(平井宥慶[1991]pp.377−379)、『纘述』の成立は少なくとも639年以前[13]と見られるため、玄奘訳(645年以降の訳出)が用いられる[菜11]は『纘述』以降、さらにいえば『玄贊』以降ということになろう。ともあれこの二本からは『玄贊』の『纘述』に対する依拠の顕著さを窺い知ることができる。

その他一説によれば、[S.4107]と天津市芸術博物館蔵敦煌文書**[津藝244(77・5・4583)]**(「方便品」)とを同疏と看做しているが、その具体的な論拠は示されていない[14]。試みに『纘述』の抄出であり、同じく「方便品」を有する[S.6494]と比較してみたが両者符合せず、『纘述』との共通点は見出し得なかった。

このほかに西域出土文献のなかから『纘述』そのものを見出し得たため、ここに報告しておきたい。中国国家図書館蔵敦煌本に存する**[致15]**(「序品」)がそれであり、韓国に現存する刊本(宝物 第206号・Kor.206)の巻第二(「序品」)に該当し、その二十四張右六行目の「四思惟定」から、三十三張右九行目の「希有因成」までを有する。

---

12) 詳しくは、(拙稿[2010・2012b])を参照されたい。

13) 詳しくは、(拙稿[2012b]pp.52−54)を参照されたい。

14) (于淑健[2012]p.24)参照。

2-3. III. [S.2463]·『法華經疏』(T.85 No.2750)

『解説』(pp.99-100)、(平井宥慶[1978b]pp.114-117·[1993]pp.651-652)、(方廣錩[1998F]p.45)に詳しい。

当該写本は紙背にある曇曠(CE.-763-)の『大乘入道次第開決』(T.85 No.2823)を書写するために貼り合せたもので、本疏はその表に在り『大正蔵』は「随喜品」の後半から「普賢品」の末尾までを収めている。

しかし『大正蔵』は『鳴沙餘韻』の書影(pls.31-32·144MF[15]の37-49コマ·以下②)を載せただけで、写本にはこの前半部にあたる53行(144MFの28-31コマ·以下①)が含まれている[16]。すなわち本疏は①と②を合わせて300行(「寿量品」~「普賢品」)が存することになる。

①の識語は「分別功徳品」があり、②は「法師功徳品、常不軽品、如来神力品、嘱累品、薬王本事品、妙音菩薩品、觀音品、陀羅尼品、妙荘嚴王品、普賢品」がある。

間に「分別品」の後半から「随喜品」の前半を欠く[17]。「普門品重頌偈」(569年闍那崛多訳)の釈が見当たらないことからそれ以前の成立と見られる。「(有)一解」(①に四例、②に三例)と異解を提示しているが、その出典は不明(だだしIとIVに類似する語句は確認できる)であり、(矢吹慶輝[1932]p.27)には「法雲の義記、吉藏の疏略(ママ)、智顗の文句、窺基の玄賛を始め之と符合するものを見ない。」とある。

他疏との関係については、先述した**[淡32]**の、**各品の開口句**、すなわち「薬草喩品」の「此品何由而興」(=[A1])と「授記品」の「此品所以而來」

15) 全144巻のmicrofilmのこと。詳しくは(中田篤郎[1989]「はじめに」)を参照されたい。

16) 『大正蔵』未収録の53行の全文は〈参考資料Ⅰ〉を参照されたい。

17) 試みに『大乘入道次第開決』の別の写本(=[S.6915]·[BD08705(宮65)]·[P.2202v])を調査してみたが、間の欠損部は見出し得なかった。

(＝[B1])が、本疏では「妙荘嚴王品」(「随喜品」の開口句は欠損のため確認できない)を除き、このいずれかの形を有すること[18]及び注釈方法の形態的特質が類似することが平井宥慶教授によって指摘されており、平井宥慶教授は結んで「この両本は、慎重を期して同一疏とは確定しないが、限りなく近く同時代的形状を呈していることは疑いない。」(平井宥慶[1993]pp.651−652)との見解を示している。

また藤枝晃博士は[S.113v](「序品」～「方便品」)と注釈形式及び筆跡

18) 厳密には、[A1]・[A2]・[B1]・[B2]・[B3]・[C0]の六つのタイプに分けることができる。

【表３】[S.2463]と[淡32]の各品の開口句のタイプ別分類

/28	品名	タイプ	出典
5	「藥草喩品」	[A1] 此品何由而興	(淡32(BD06199) p.11, *l*.255)
17	「分別功德品」	[A1] 此品何由而興	(S.2463① p.30, *l*.39・〈参考資料Ⅰ〉)
25	「觀音品」	[A2] 此品何由而來	(S.2463② p.46, *l*.175・T.85 no.2750 p.193a, *l*.20)
6	「授記品」	[B1] 此品所以而來	(淡32(BD06199) p.15, *l*.293)
19	「法師功德品」	[B1] 此品所以而來	(S.2463② p.37, *l*.5・T.85 no.2750 p.189c, *l*.7)
21	「如来神力品」	[B1] 此品所以而來	(S.2463② p.39, *l*.38・T.85 no.2750 p.190b, *l*.11)
22	「囑累品」	[B1] 此品所以而來	(S.2463② p.41, *l*.74・T.85 no.2750 p.191a, *l*.15)
23	「藥王本事品」	[B1] 此品所以而來	(S.2463② p.42, *l*.94・T.85 no.2750 p.191b, *l*.19)
28	「普賢品」	[B1] 此品所以而來	(S.2463② p.48, *l*.227・T.85 no.2750 p.194a, *l*.28)
26	「陀羅尼品」	[B2] 此品所以而興	(S.2463② p.47, *l*.194・T.85 no.2750 p.193b, *l*.27)
20	「常不軽品」	[B3] 此品所以　來	(S.2463② p.38, *l*.16・T.85 no.2750 p.189c, *l*.28)
24	「妙音菩薩品」	[B3] 此品所以　來	(S.2463② p.44, *l*.142・T.85 no.2750 p.192b, *l*.18)
27	「妙荘嚴王品」	[C0] 未來世中	(S.2463② p.47, *l*.209・T.85 no.2750 p.193c, *l*.26)

このうち、[A1]は両疏にのみ、[B2]は[S.2463]だけに見られる。[A2]はⅠ②『法華義記巻第三』「従地踊出品」に一回(T.85 no.2748 p.178c, *l*.18・S.4102 p.16, *l*.347)、[B1]は吉蔵撰『仁王般若經疏』巻中四に一回(T.33 no.1707 p.339a, *l*.18)、[B3]は吉蔵撰『中觀論疏』巻第六本に一回(T.42 no.1824 p.91c, *l*.20)、同巻第八末に一回(T.42 no.1824 p.123b, *l*.25)、惠龍写記(CE.539)『維摩經義記』(＝[S.2732])巻第四に二回(T.85 no.2769 p.342c, *l*.9, p.346c, *l*.27)、慧影抄撰『大智度論疏』巻第十七に一回(SZ.46 no.791 p.855b, *l*.19)、同巻第二十一に一回(SZ.46 no.791 p.886b, *l*.17)と他疏においても確認することができる。なお、[C0]を開口句とする文献は確認できない。

が似ていることから「同疏であるか」と推測したが、平井宥慶教授は上記の特質点が確認できないことから「同一本とは認め難い」(平井宥慶[1993]p.652)とする。

2-4. Ⅳ. [S.2439]・『法華經疏』(T.85 No.2751)

『解説』(pp.100-101)、(平井宥慶[1978b]pp.117-120・[1993]pp.653-659)、(方廣錩[1998F]p.45)、また(拙稿[2013])に詳しい。

識語に「嘱累品、藥王品、妙音品、觀世音品、陀羅尼品、妙荘厳王品、普賢品」がある。

平井宥慶教授によって本疏[S.2439](以下、③)と**[暑70]**(「法師功徳品」～「神力品」・以下、②)が同本離片であることが論証されており、その論拠(②≡③)として以下の三点が示されている。

1. この疏の特徴の一つは、科段構成に注釈勢力を費やしていること〈経の**大段第四**流通文の一致・神力品の分科の一致〉である。
2. 注釈方法が、各品の冒頭句〈**従此已下**〉も含めて、酷似する。
3. その書体が著しく近似する。

これに筆者によって**[P.4567]**(「分別品」～「法師功徳品」・以下、①)もがその同本離片であることが論証された。

その論拠(①≡②)は〈[経の**大段第三**の]果門中の大段第四が一致〉するからである[19]。

したがって本疏(①[P.4567]≡②[暑70]≡③[S.2439])は**一経四段**[20]の

19) 詳しくは、(拙稿[2013])を参照されたい。なお、従来の研究成果を年代順に並べると以下のようになる。(1) (平井宥慶[1978b・1993])⇒[P.4567]≠[S.2439]≡[暑70]≒[玉26]、(2) (『BnF』V[1995])⇒[P.4567]≡[S.2439]、(3) (方廣錩[1998E・1998F])⇒[P.4567]≡[S.2439]≠[暑70]≡[玉26]、(4) (金炳坤[2013])⇒[P.4567]≡[S.2439]≡[暑70]。したがって、上三本の同本離片たることを論証したのは、筆者が初めてである。

構造を特徴とする同本離片ということになる。

さて本疏はIIIと同様「普門品重頌偈」の釈を欠く。IIIとは同品に対する釈文が明らかに異なるため別本であることが判る。ただし、両疏の「法師功徳品」の釈文からほぼ一致する文例[21]が見られるため、どちらかが一方を或いは同じ底本に基づいていた可能性がある。

とりわけ[玉26](「譬喩品」～「信解品」)と注釈形式がよく似ていることが指摘されており(平井宥慶[1993]p.658)、[玉26]と②については方廣錩博士によって、「上記の両号(＝[玉26]・[暑70])は文章の形式が一致し、筆跡も同様であることから、同一人物によって書写された同一種類の経疏であろう[22]。」という推定がなされているが、積極的な根拠

20) 一経四段の分科については、法雲の師にあたる僧印(CE.435-499)のものが知られているが(『法華義疏』T.34 no.1721 p.452c)、本疏の分科とは一致せず、『妙法蓮華經文句』(T.34 no.1718 p.137a)において示される**北師**(詳細不明。ちなみに先述の曇影は北人と知られている・前掲の註(9)参照)の分科が本疏と一致をみる。

21) III②『法華經疏』(＝[S.2463])の「法師功徳品」に「⑵今解。依舊經。六根齊等。鼻舌身三根塵到。故知。三根遙囑者也。此當是凡夫六根也。今道六根清淨者。此是性地菩薩。受持此經。經力勳修。盡皆遙囑。故道遙囑香也。受持得一百。乃至書寫。生五百善。教人復生五百。是一千善。自性隨喜。教人隨喜。復二百。是爲千一百也。是善男子以下。別明六根也。⑴舌根道變者。食體資身。要侍破質。得未成身最勝。故道變也。」(T.85 no.2750 p.189c, *ll*.14-22・S.2463 p.38, *ll*.9-14)と、IV②『法華經疏』(＝[暑70(BD06196)]) の「法師功徳品」に「⑴舌變者。明食資身。要待破質。得味成身。故道變也。餘塵不須故質剉獲成身資用。故不言變。依如⑵今解。三根塵到。三根玄囑。今明下依性地大士入怛積德經力勳修斯皆玄囑。」(暑70(BD06196) p.1, *ll*.5-8)と類似する文例が見られる。引用文中、記号⑴などは筆者による。

22) 「二、≪法华经疏≫，作者不详。原著卷数不详。北图存2号：**(一)玉26号**，首尾均残，存337行，所疏为≪譬喻品≫第三(首残)、≪信解品≫第四(尾残)。**(二)暑70号**，首尾均残，存98行，所疏为≪法师功德品≫第十九(首残)至≪如来神力品≫第二十一(尾残)。上两号体例一致，笔迹相同，当为同一人所书之同一种经疏。原卷无标题，今题系据内容所拟。因卷首已佚，本疏科分不清。释文较精。从行文风格看，似为六朝时作品。本疏未为历代大藏经所收。」(方廣錩[1998F]p.45)参照。

はなく、また本疏の①と②の翻刻を終えている筆者の理解では、同様の筆跡とは認め難い[23]。

また[玉26]は[P.3308](「方便品」・法華経義記第一巻　利都法師釋之／比丘曇延許・536年[24])と思想的に極めて近接することが指摘されている(平井宥慶[1993]pp.659−662)。

実は①は「随喜品」の途中から筆跡が変わることで、写経グループの存在を示唆しているが、[P.3308]は本疏と筆跡が類似するところがある。したがって、この写経グループの存在を勘案すれば、[玉26]は本疏とは明らかに筆跡同じからずと雖も、注釈形式がよく似ていることから同疏である可能性までは否定できず、この五本の同疏［同疏であるとすれば、六朝古逸法華疏中、最大分量([玉26]338行、[P.3308]114行、①[P.4567]92行、②[暑70]98行、③[S.2439]240行)を有する文献になる］如何を論ずることが今後の課題になると考えられる。

23) ちなみに平井宥慶教授も、「(リ)北京本『玉26』(写本番号六一九七)……書体からみても明らかに(チ)(ト)本(＝[暑70]・[S.2439])とは異なる手になる写本である。」(平井宥慶[1978b]p.120)と筆者と同様の見解である。

24) [P.3308]の奥書は以下のとおり。

P.3308_110(06):　利都法師釋之

P.3308_111(20): 法華經義記第一卷　比丘曇延許　丙辰歳　用紙卅張

P.3308_112(21):　大統二年歳次丙辰六月庚件朔三日□酉寫此法華

P.3308_113(18):　儀記一部願令此福逮及含生有識之類齊悟

P.3308_114(06):　一實无二之理

2-5. V. [S.2662]·『法華問答』(T.85 No.2752)

『解説』(pp.102-105)、(平井宥慶[1977c]p.68)、(方廣錩[1998F]p.45)に詳しい。

通して103番の問答(前後の1問答は残欠)が現存し、始めから46問答までは『法華経』の品順にしたがって、後の57問答は品順に拘らずに法数要句について注釈する。

識語は「方便品十條、譬喩品廿二條、信解品三條、藥草喩品一條、授記品二條、化城喩品一條、壽量品一條、法師功德品一條」があるが、実際の問答数は識語とおりではない[25)]。

吉藏や慧淨の名[26)]を出すことからそれ以降の成立と見られる。『纘述』(『法華論』)を下敷にしたその末註であることが筆者によって検証されている[27)]。

『解説』(pp.103-105)には留支訳『法華論』との対比が示されているが再検討の余地がある。

---

25) 九品に割当てられる実際の問答数は「序品」4、「方便品」10、「譬喩品」22、**「信解品」1**、「藥草喩品」1、**「授記品」3**、「化城喩品」1、**「安楽行品」1**、「寿量品」1、**「法師功德品」2**である。

26) 吉藏は一例、慧淨は二例見られる。出典は以下のとおり。『法華問答』に「(73)問。汝來說法必有要歸。未審此經以何爲宗旨　答。諸師辯宗各各不同。今依徵宗有二種。一者體宗。二者用宗。非二非一。是其體宗。破三歸一。是其用宗。法無二會。對器得名。會假歸眞。形三一立三名無遣一號亦三故。法句經云。一亦不爲一爲欲破諸數淺識之所聞見一以爲一卽其義也。淨法師以一乘爲宗」(T.85 no.2752 p.203a, *l.*25 - p.203b, *l.*3·S.2662 p.11, *ll.*244-249)と、「(91)何者藏法師以三界爲三百。二原爲二卽五百。惠淨法師以五道爲五百。三途爲三百。人天二百卽五百。幷此以宗三類不同。地意卽同」(T.85 no.2752 p.204a, *ll.*24-27·S.2662 p.13, *ll.*306-308)とある。

27) 詳しくは、(拙稿[2012b]p.54)を参照されたい。

3.『纘述』と[S.4107]との関連性について

慧淨の『妙法蓮華經纘述』の存在は、比較しうるに適切な史料を欠くことで、それ以上は研究を進められずに低迷の一歩を辿っていた、これまでの西域出土法華章疏の研究分野において確かなるともしびをもたらした。『纘述』は、作者未詳・不知題の西域出土法華章疏の解明に繋がる、正しくその糸口になるのである。

さて『纘述』(十巻)の現存状況については、(拙稿[2012b]pp.34−35)において明らかにしたように、①「序品」第一(巻一・二)は完全な形で現存し、②「方便品」第二(巻三・四)は散逸したが、『纘述』を適宜に抄出している『妙法蓮華經論義』(=[S.6494])によってその大体を窺い知ることができ、③「譬喩品」第三(巻五)・「信解品」第四・「薬草喩品」第五・「授記品」第六(巻六)は、現存本の損傷は激しいものの、現存することが確認できている。

しかし「化城喩品」第七以下に関しては、未だにその存在が確認できていない。

以下では、今なお散逸のままである『纘述』の「化城喩品」第七以下(巻七〜十)に対する模索、すなわち『纘述』の散逸部の発見につながる可能性を秘めている新たな史料の検討として、2−2. において言及したように、『纘述』の逸文が多数集録されている『法華經玄贊要集』を手がかりと、『要集』所引の『纘述』の逸文と[S.4107]との関連性について考察する。

3-1.『要集』と[S.4107]との対比箇所検討

[S.4107]の現存部における『妙法蓮華經』の最初の経文は、「如來壽量品」第十六の「値遇者。㷔難値也。所以者何[28]。」(T.85 no.2749 p.180a, *l*.5・S.4107 p.1, *l*.1)であり、最後の経文は、「常不輕菩薩品」第二十の「經曰。卽得[29]」(T.85 no.2749 p.189b, *l*.20・S.4107 p.24, *l*.512)である。

『要集』には、**巻第三十三**に「○自下釋如來壽量品。」(SZ.34 no.638 p.868a, *l*.24)とあり、**巻第三十四**に「今頌述云。我於前世勸是諸人六行等是(禮衆勸勉)[30]。」(SZ.34 no.638 p.898c, *ll*.20-21)とある、ここまでが「常不輕菩薩品」の釈文に該当する。

『要集』の巻第三十三・三十四のうち、[S.4107]と比較検討の可能な箇所には、「紀國云」と始まる『纘述』からの引用と見られる15例(含、又云・名のみ)を確認することができる。

3-2.『要集』所引の『纘述』の逸文と[S.4107]との比較検討

以下、『要集』所引の『纘述』の逸文15例(①～⑮)と[S.4107]との対応関係を示しておく。

---

28)『妙法蓮華經』「如來壽量品」に「諸佛出世難可値遇。所以者何。」(T.9 no.262 p.42c, *l*.2 - p.43a, *l*.1)とある。

29)『妙法蓮華經』「常不輕菩薩品」に「卽得如上眼根清淨耳鼻舌身意根清淨。」(T.9 no.262 p.51a, *ll*.5-6)とある。

30)『妙法蓮華經』「常不輕菩薩品」に「我於前世　勸是諸人　聽受斯經　第一之法」(T.9 no.262 p.51b, *l*.29 - p.51c, *l*.1)とある。

	『要集』(SZ.34 No.638)		[S.4107]
① ② ③	言良醫等者。①**紀國云**。醫者意也。[31]善解四病之原。妙通八術之要。下針定差。投藥必愈。故曰良醫。阿含經說。良醫具四德。一識病體。喻知苦諦。二識病因。喻集諦。三識病滅已等。喻知滅諦。四識病滅已更生。喻知道諦。問何名病更生。答煩惱病有漏道伏。遇緣還起。如病滅已更生。若無漏道。已不生也。②**又云**。外道治病還發。爲下醫。二乘治病或發。爲中醫。如來治病畢竟不發。爲上醫。醫者說文治病士也。醫性多嗜酒。故字從酉。 (「如來壽量品」p.878a, *l*.22－p.878b, *l*.6) 言明練等者。③**紀國云**。方喻二乘教。教名方也。藥喻於理。所詮理名藥。審教知理。故云明練方藥。隨授必了。名善治衆病也。 (「如來壽量品」p.878b, *ll*.10−12)	= = =	經曰。譬如良醫至善治衆病者。第二譬說兩重。一明不死作住有餘譬。二明唱死作入無餘譬。不死十重。一教主譬。二根緣譬。三道隱譬。四或生譬。五佛興譬。六機過譬。七說教譬。八令修譬。九利解譬。十鈍迷譬。此第一教主譬[32]良善也①醫意也。善解四病之原。妙通八術之要。下針定差。投藥必愈。故曰良醫。阿含經說。良醫有四德。一知病。二知病因。三知治方。四知差已不生。如來亦爾。一知苦。二知苦因。三知苦滅。四知苦滅道故名良醫。凡夫能治二界煩惱爲下醫。二乘能治三界煩惱爲中醫。如來能治四界煩惱爲上醫。②又外道治病還發。爲下醫。二乘治病或發不發。爲中醫。如來治病畢竟不發。爲上醫。故曰良醫。意無不決爲智。聽無不了爲聰。思無不通爲達。智譬種智。聰譬六通。達譬三達。方以譬教。藥以譬理③審教知理。故[33]曰明練方藥。隨授必行。故曰善治衆病。 (T.85 no.2749 p.180a, *l*.16－p.180b, *l*.4・S.4107 p.1, *ll*.8−20)

31) 惠淨撰『溫室經疏』に「祇域者指名字也。祈域梵音。此云能活。善解四病之原。妙通八術之要。下針定若投藥必愈。有此之能故稱能活也。」(T.85 no.2780 p.537b, *ll*.4−9)と一致する文例が見られる。引用文中、下線は『溫室經疏』と『要集』・[S.4107] との一致箇所を示す。

32) 作者未詳『天請問經疏』に「誰是大良醫者此第四問。良者善也。醫者意也。善識病源。沙閑藥性。療者必差。稱曰良醫。良醫有四義。一知病。二知病因。三知病差。四知差已不生。未知法中頗有良醫大過如此良醫以不」(T.85 no.2786 p.564a, *ll*.6−10)と一致する文例が見られる。引用文中、下線は『天請問經疏』と『要集』・[S.4107] との一致箇所を、下

④	經云其人多諸子息若十二十等。**紀國云**。受化爲子。傳化爲息也。今且說有種性子。不說種子也。 (「如來壽量品」p.878b, *ll.*13−14)	=	經曰。其人多諸至乃至百數者。第二根緣譬。受化爲子。傳化爲息。[34]**舊解**上根爲十。中根爲二十。下根爲百數。勝人少劣人多故。 (T.85 no.2749 p.180b, *ll.*5−7・S.4107 p.1, *ll.*20−22)
⑤ ⑥	言[35]遣言教使者。跋提河邊唱滅。說遺教經。卽言教使。或涅槃經後兩卷是。⑤**紀國**取分布碎身舍利爲使。嘉祥取泥土等佛像爲使等。⑥**紀國云**。[36]子見神杜知文。經法中見佛遺身舍利。信言入滅。 (「如來壽量品」p.880a, *ll.*2−5)	≒ ×	經曰。作是敎已至汝父已死者。第七現滅也。作是敎已者。付囑已周。復至他國者。身歸寂滅。遣使還告者。⑤碎身布骨。汝父已死者。隱智韜光。 (T.85 no.2749 p.181a, *ll.*12−15・S.4107 p.3, *ll.*60−62)

線は『天請問經疏』と[S.4107] との一致箇所を示す。

33) 『大正蔵』には「日」とあるが、写本に「曰」とあるため、「曰」に訂正した。

34) 「**舊解**」とは、吉藏撰『法華義疏』(以下、『義疏』)巻第十に「或十二十乃至百數者上根難得爲十。中根稍易得稱爲二十。下根轉多故稱爲百。」(T.34 no.1721 p.608a, *ll.*1−2)とあり本箇所に対応する。[S.4107] を『纘述』の抄出と仮定すれば、『纘述』は『義疏』を参照したことになろう。

※[S.4107] に「舊解」は三例あり、ここ④と、後述の⑭は、『義疏』からの引用である。もう一例は、「經曰。諸子飲毒至更賜壽命者。第六機過譬。失心者行淺惑深忘於本見。不失心者行深或淺。猶存**舊解**。位在暖前得暖則不受邪敎故。」(T.85 no.2749 p.180b, *ll.*18−21・S.4107 p.2, *ll.*28−30)とあり、ここは吉藏撰『法華玄論』巻第二に「問三引究竟何故復說涅槃。答諸子有二種一不失心二者失心。不失心子聞三引究竟皆得領悟。餘失心子聞三引不悟。故方便唱滅爲說涅槃方得受道也。若爾涅槃最爲鈍根人說。問涅槃爲鈍根人說者應淺耶。答敎非淺也。但於緣悟故轉勢說之。如猶是一藥。不失心者前服失心者後服。猶是一正道。利者前悟鈍者後悟。涅槃法華更無異也。」(T.34 no.1720 p.373c, *ll.*12−20)とある本箇所からの取意と考えられる。

35) 基撰『妙法蓮華經玄贊』巻第九末に「經作是敎已(至)汝父已死　贊曰。示言入滅還隱前化名至他國遣言敎使唱言入滅云汝父死。父實不滅暫息化故」(T.34 no.1723 p.832c, *ll.*4−6)とあり本箇所に対応する。

36) ちなみに[菜11] の該当箇所(BD06199 p.13, *l.*275 − p.14, *l.*276)からは、類似文例は見当

⑫	**紀國云**。攝論說。三地菩薩得大法光明。聞持陀羅尼。以爲依止能勸人功德。 (「隨喜功德品」p.887c, *l*.24 – p.888a, *l*.1)	=	聞持者。⑫攝論云。三地菩薩得不退定大法光明。聞持陀羅尼。以爲依止。案三地證見法界勝流始得聞持。樂說者。若約師位在第九。⑦隨分在五六地。捉持者。七地證見法界無差別功德功用心住無相無間故得義。持八地證見法界不增滅無功用心恒住無相有相有⑧功用不能退轉。爲他說此九地轉不退爲勝。從初爲名淸淨者。第十地⑨因位究竟名淸淨。爲他說。此名淸淨。攝論云。初地名得淸淨。至第十地究竟淸淨。次現聞當證謂證初無生。 (T.85 no.2749 p.182b, *ll*.13–22·S.4107 p.7, *ll*.134–141)
⑦	言樂說辨才等者。具者不是具足。但是說法器具。卽五明論是辨才之作具也。**紀國云**。隨分得在五六地。殊勝在第九佛位圓滿。 (「分別功德品」p.882b, *ll*.7–9)	=	
⑧	言不退法輪等者。**紀國云**。不被有功用退轉。 (「分別功德品」p.882b, *l*.19)	≒	
⑨	言淸淨法轉者。經言。復有二千國土者。或是二千箇國土。或是小千世界。名二千國土也。**紀國云**。因位究竟名淸淨。爲他說。此名淸淨法輪。攝論云。初地淸淨。第十地名究竟淸淨。 (「分別功德品」p.882b, *ll*.21–23)	=	
⑩	**紀國云**。諸天祥瑞下羅。菩薩乃神幡上[37]烈。諸天在上故。向下呈祥。菩薩地居故。上浮空表。 (「分別功德品」p.883a, *ll*.22–23)	=	經曰。佛說是諸菩薩至供養大會者。自下第三因聞供養兩重。一諸天供養。二菩薩供養。諸天卽祥瑞下羅。菩薩卽神幡上列。諸天在上故。向下呈祥。菩薩地居故。浮空表瑞。 (T.85 no.2749 p.182b, *ll*.23–26·S.4107 p.7, *ll*.141–143)

たらず、むしろ[菜11] は『玄贊』(T.34 no.1723 p.832c, *ll*.4–6)に類似している。

37)【SZ.34 p.347 脚註❷】「烈通列同下」

38)【SZ.34 p.886 脚註❹】「二疑四」、「兩」の誤読であろう。

39)『要集』の「**古有二釋**」とは、『妙法蓮華經玄贊』巻第十本に「贊曰。此顯所得功德多少。初辨後結。**古有二解**。一云十善爲本。一善皆有九善助成。各成十行。十行各有自作·敎他·讚歎法勝及讚行十善者。合成四百。此四各有上·中·下修合千二百。耳·舌·意三。聽聞·談說·心得法義。修行力勝具足三品各千二百。餘三根劣都無上品故唯八百。若依十善爲首

⑪	言隨所聞思等者。**紀國云**。隨喜有[38]二。一自聞生。隨喜生聞慧。因聞慧生思慧。因思慧生修慧。因修慧生證智。此四卽以隨喜爲本。故隨喜品也。 (「隨喜功德品」p.886c, *ll*.5-7)	=	隨喜有兩。一自聞生憙。二勸聞生喜。自聞生喜卽受他法施。勸聞生喜。卽以法施他。受他法施。明生自聞慧。以法施他。令他生聞慧。生自聞慧。卽自利行。生他聞惠。卽利他行。如是因聞隨喜生聞惠。因聞惠生思惠。因思慧生修惠。因修惠生證智。聞卽熏。思卽覺。修卽寂。證卽通。此四卽以隨喜爲本。故名隨喜品。 (T.85 no.2749 p.183c, *ll*.19-25・S.4107 p.10, *ll*. 207-211)
⑬	言[39]**古有二釋**者。[40]章敬云。初解出自注經。**後解**嘉祥**紀國**也。 (「法師功德品」p.889b, *ll*.1-2)		同下
⑭	言六根各具百福者。卽是嘉祥**紀國**。[41]經云。百福相莊嚴。藥王品云。百福莊嚴臂。則知六根皆具百福。一一福中皆有十善莊嚴等。[42]**問**何名百福。**答**百福卽是百果也。能感因卽是十善。一善爲頭。餘九善助。十善更互爲頭。計成一百箇善。**問**百福與百善何別。**答**能感所感因果別故。因嚴於果。理不相違。**問**如何成於千。**答**古師云。又將一百箇果爲頭。一一果中有十善行。助能資所資。[43]合成一千。六根各一千。合成六千。⑭三根勝故。各增二百。三根劣故。各減二百也。 (「法師功德品」p.889b, *l*.18 - p.889c, *l*.2)	≒	經曰。是人得八百眼功德至千二百意功德者。亦果也。[44]正法華及莊嚴論。六根各具千二百功德。合有七千二百功德。今經六根二例。三根各八百。三根各千二百。[45]**舊解一云**。十善爲本。一善以九善莊嚴。十善成百善。自行百敎他百歎百法歎行百者。合有四百善。此四百有三品。成千二百。三根持經勝具三品故有千二百。三根持經劣但有中下品故唯得八百。[46]**二云**。六根各具百福。一一福以十善莊嚴成一千。一根一千六根卽六千。但⑭三根弘經勝故增二百。三根弘經劣故減二百。 (T.85 no.2749 p.186b, *ll*.13-23・S.4107 p.16 *ll*.147-354)

修成此德。餘經亦爾。六根功德亦應如是。何但此經。**二云**六根各有百福。…」(T.34

⑮	言[47]有解在於等者。古解也。⑮**紀國云**。據此經文道理。上不是初地。下不是十信。卽是十住十行十迴向。非於十信者。持經力弱故。不取之也。言以其肉眼見大千。故出所以也。 (「法師功德品」p.890c, *l*.23 – p.891a, *l*.2)	×	該当箇所無し

no.1723 p.837b, *l*.28 – p.837c, *l*.5)とある「**古有二解**」を指し、「**後解**」とはここの「**二云**」以下を指す。すなわち章敬の云うが如くであれば、『玄贊』における「**二云**」以下は吉藏や慧淨の説が採用されていることになる。

40) 詳細不明。章敬懷暉(CE.756–815)のことか。慧淨に対して批判的な態度がとられる。

41) 『法華義疏』巻第十一に「**有人**言。就百福爲論。此經云百福相莊嚴。藥王品百福莊嚴臂。則知六根皆具百福。一一福各十善莊嚴成一千功德。」(T.34 no.1721 p.614c, *ll*.22–24)とあり本箇所に対応する。

42) 『要集』の以下の二問答は出典不明。『義疏』や『纘述』のいずれかに対応する可能性が高いが、『義疏』には見当たらず、[S.4107] にも該当箇所はない。『要集』が設けた問答かも知れないが詳細は不明である。ともあれ[S.4107] を『纘述』の抄出(不採用の場合)と仮定すれば、『纘述』からの引用ということになろう。

43) 『妙法蓮華經玄贊』巻第十本に「**二云**六根各有百福。一一皆以十善莊嚴。合成一千。六根合此總有六千。三根勝故增得二百。三根劣故各減二百。」(T.34 no.1723 p.837c, *ll*.4–7)とあり、『義疏』や『纘述』のいずれかであろうが、『義疏』(後掲の註(46)参照)よりも[S.4107]に類似することから、[S.4107] を『纘述』の抄出と仮定すれば、ここは『玄贊』が『纘述』を参照したことになろう。

44) 『妙法蓮華經玄贊』巻第十本に「**古解**引正法華・及莊嚴論六品各一千。眼・鼻・身三併與二百其數何也。又百福者十十善因所感之果。今以因助未見所由。今正解者。本論之中唯說三根各千二百・餘三各八百不得將莊嚴論例同此經。」(T.34 no.1723 p.837c, *ll*.7–12)とあり、「**古解**」とは『義疏』や『纘述』のいずれかに対応する可能性が高いが、『義疏』には見当たらない。[S.4107] が『玄贊』を参照した可能性も残るが、[S.4107] を『纘述』の抄出と仮定すれば、ここも『玄贊』が『纘述』を参照したことになろう。

45) 「**舊解一云**」とは、『法華義疏』巻第十一に「**有人**言。菩薩行十善。一善亦以九善莊嚴故成十善。十善便成百善。自行百善。敎他行百善。歎法爲百歎人爲百。合爲四百。此之四百有上中下品。成千二百。三根持經用勝具得三品故有千二百。餘三根持經用劣但得中下二品故有八百。」(T.34 no.1721 p.614c, *ll*.16–22)とあり本箇所に対応する。[S.4107] を『纘述』の抄出と仮定すれば、『纘述』は『義疏』を参照したことになろう。

以上の対応関係をまとめると、

一致(=)：①、②、③、④、⑦、⑨、⑩、⑪、⑫の9例
類似(≒)：⑤、⑧、⑬、⑭の4例
無し(×)：⑥、⑮の2例

という結果となり、『要集』所引の『纘述』の逸文15例のうち、13例が[S.4107]と一致或いは類似することが明らかになったのである。

したがって、両者(=『要集』・[S.4107])の取捨選択を考慮に入れても、15例のうち、13例が一致或いは類似することは、[S.4107]を直ちに『纘述』の抄出であると判ずることはできなくとも、確かに『纘述』を受けてのそれ以降に成立した文献であるということができるのである。

なお、非常に複雑な引用関係が見られる⑬・⑭からは、あくまでも[S.4107]を『纘述』の抄出か、その影響下にある文献と看做した場合の仮定に過ぎないが、改めて『義疏』→『纘述』→『玄贊』という関係を推察することができる。この点については、今後さらに検討を加えていきたい。

また、『要集』の『玄贊』に対する引用態度については、慈恩基によって色付けされ、自流の解釈が施された『玄贊』における他疏の説を、も

46)「[舊解]**二云**」とは、『法華義疏』巻第十一に「**有人**言。就百福爲論。此經云百福相莊嚴。藥王品百福莊嚴臂。則知六根皆具百福。一一福各十善莊嚴成一千功德。一根一千則爲六千。但❶三根於弘經事勝功德則多❷餘三既劣故少也。」【T.34 p.614 脚註❶】「三+(耳舌意)傍註㊥」【T.34 p.614 脚註❷】「餘+(眼鼻身)傍註㊥」(T.34 no.1721 p.614c, *ll.*22-26)とあり本箇所に対応する。[S.4107] を『纘述』の抄出と仮定すれば、『纘述』は『義疏』を参照したことになろう。

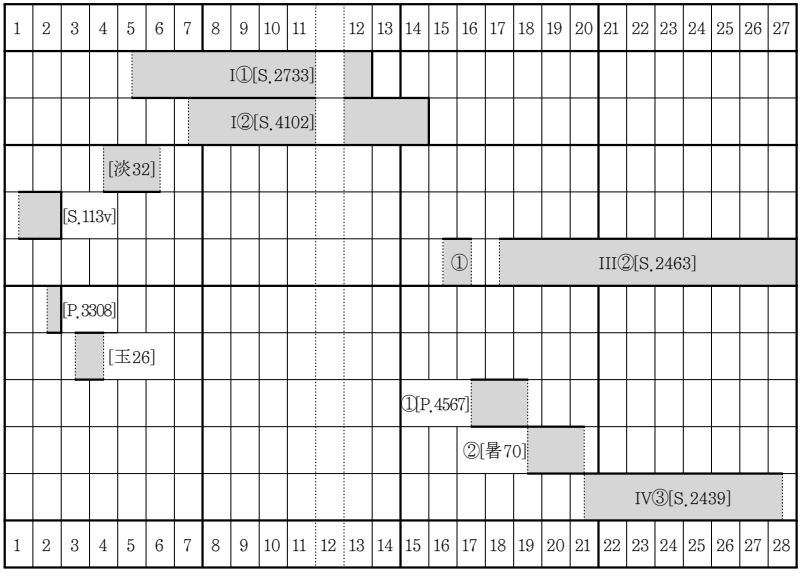
47)『妙法蓮華經玄贊』巻第十本に「有解在於十住十行十迴向中。非於十信力猶弱故。今解唯在四善根位。以其肉眼見大千故。」(T.34 no.1723 p.838a, *ll.*3-5)とあり本箇所に対応する。

とのかたちに還元し、本来の理解を追及しようとしたということがいえるのであろう。

4. 今後の課題と展望

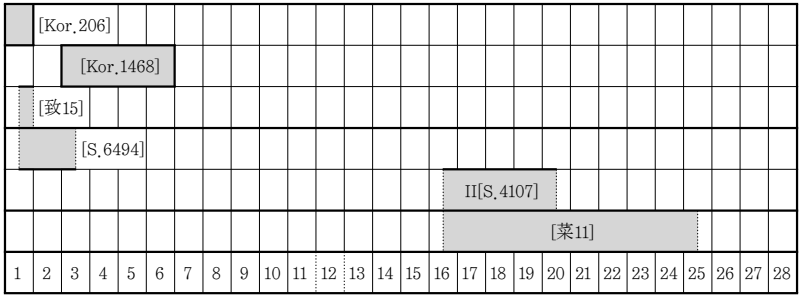
古逸部収録本を中心として展開されてきたこれまでの西域出土法華章疏の研究は、以下の二つの時期、すなわち道生や法雲に代表される5～6世紀の半ばまでに成立をみる一群【第1期】と、智顗、吉藏以降、慈恩基までの7世紀を前後として成立した一群【第2期】とに区別されるなか、主に【第1期】に属する文献を対象としたものであった。

【図１】六朝古逸『法華經疏』(随文釈義)の現存状況【第1期】



しかし本稿では、【第2期】に属する文献の解明に努めるべく、この時期の中軸をなす慧淨の『纘述』を中心に、【第2期】に属する法華章疏において、『纘述』の影響［とくに『玄贊』に対する影響を含めて］が顕著であることを究明したのである[48)]。

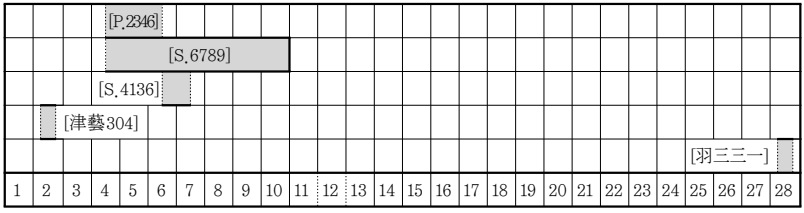
【図２】慧淨の『纘述』及び関連史料の現存状況【第2期】



この事実に基づくなら、現に吉藏の①『法華義疏』、②『法華遊意』の異本乃至別本に比定されている①[P.2346]・[S.6789](1560行中358行までの約2割が翻刻されている・平井宥慶[1985・1986・2000])・[S.4136]・[津藝304(77・5・4643)]・[羽三三一]、②[S.6891](877行中196行までの約2割が翻刻されている・平井宥慶[1981c])についても『纘述』との関連性において再考の余地があろう。

48)【図２】のうち四本〔＝第三類：[S.6494]、第四類：[S.4107]・[菜11]・[致15]〕については、曾て平井宥慶教授によって、「第四類では、注釈の形式・方法ともに窺基の『玄贊』に類同する点が特徴で、第三類は内容・形式ともに第二類とも第四類とも距離をおいているようにみられるが、時代的には第四類に属するものか。」(平井宥慶[1977c]p.72)との指摘がなされていたこともあり、筆者にとって『纘述』〔＝[Kor.206]・[Kor.1468]〕と同定・比定するための史料選定にあたって大いに参考になった。筆者による『纘述』及び『纘述』関連史料の発見は、平井宥慶教授の学恩・識見によるものに他ならない。ここに記して深く感謝申し上げたい。

【図 3】吉藏の『法華義疏』関連史料の現存状況【第2期】



ちなみに[S.4136]は、浄影寺慧遠(CE.523−592)の『法華經疏』七巻[49]と推定する説がある(古泉圓順[1986])。

以上は、『法華経』の注釈史並びにその思想史的推移という次の段階へと研究を進めていくための基礎的な研究であり、今後は正しくこの課題に取り組まねばならない。

〈付録I〉平井宥慶教授の関連論考及び写本出典一覧[50]

No.1	写本番号	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	摘要(筆者)
1	**[S.2733]**		●		●	●			●					抄訳		●		道周集『義記』
2	**[S.4102]**		●		●	●			●					抄訳		●		法順写『義記』
3	[淡32]		●	●	●	●			●						抄訳	●		『*經疏』
4	[S.113v]		●	●	●	●			●							●		〃
5	[S.2463]		●	●	●	●			●							●		〃
6	[P.ch.3308]		●						●							●		利都釈『義記』
7	[玉26]		●	●	●	●			●							●		『*經疏』
8	**[P.ch.4567]**															●		同本離片
9	**[暑70]**		●	●	●	●			●							●		〃
10	**[S.2439]**		●	●	●	●			●							●		〃

49) 永超集(CE.1094)『東域傳燈目録』に「同經疏七卷(惠遠師)」(T.55 no.2183 p.1148c, *l*.23・『高山寺本東域傳燈目録』p.32, p.178)とある。

50) 〈凡例〉「写本番号(所蔵番号)」の枠内の**太字**・塗りつぶしは、同疏・同本離片を示す。〈付録Ⅰ〉の①~⑯の略語は、〈参考文献〉における平井宥慶教授の論考と対応する。「摘要」の枠内の書名の冒頭の*アステリスクは、仮題を示す。

No.1	写本番号	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	摘要(筆者)
11	[Turfan24-1]												●					『*經疏』
12	[Turfan24-2]												●					〃
13	[S.2504]		●													●		『法華論』(摩提訳)
14	[始53]		●	●												●		〃 (二訳混在)
15	[P.ch.2346]		●	●	●		●	●										吉蔵『義疏』
16	[S.6789]	●	●		●		●	●			翻刻	翻刻					翻刻	『義疏』道義纂集
17	[S.4136]	●	●		●		●	●										『義疏』関連
18	[S.6891]	●	●				●			翻刻								『義疏』開題并玄義十門』
19	[致15]		●	●														慧淨『纂述』
20	[S.6494]		●	●														『纂述』関連
21	[S.4107]		●	●									●					〃
22	[菜11]		●	●									●					〃
23	[S.2662]		●	●														〃,『*問答』
24	[S.1589]		●													●		慈恩基『玄贊』
25	[S.2465]		●													●		〃
26	[P.ch.2176]		●													●		〃
27	[P.ch.3832]		●													●		〃
28	[號66]		●													●		〃
29	[結43]		●													●		〃
30	[昃68]		●													●		〃
31	[黄12]		●													●		〃
32	[河39]		●													●		〃
33	[Ch1215r]		●													●		〃
34	[散782]		●															〃,[書博【079】]
35	[散789]		●															〃,[書博【100】]
36	[散790]		●															〃,[書博【101】]
37	[散914]		●															〃, 江藤長安莊藏
38	[散921]		●															〃, 田中慶太郎藏
39	[S.3713v]		●													●		題記(序品第一)のみ
40	[P.ch.2118v]		●													●		題記(巻第十)のみ
41	[P.ch.2159v]		●													●		詮明『玄贊科文』
42	[散791]		●															『玄贊義決』,[書博【099】]
43	[P.ch.2118r]		●															『明決要述』
44	[S.1358v]		●	●														『*經抄』, 唐
45	[S.4298]		●	●														『*問答』, 唐末
46	[S.5849]		●	●														『*經抄』, 唐
47	[制49]		●	●														『*講經文』
Total		3	44	17	11	8	4	3	9	1	1	1	4	2	1	25	1	平井：47点

〈付録II〉 矢吹慶輝·藤枝晃·中田篤郎博士の関連論著及び写本出典一覧

No.1	写本番号	矢吹 [1917]	矢吹 [1924]	矢吹 [1925]	矢吹 [1930]	矢吹 [1931]	矢吹 [1932]	矢吹 [1933]	藤枝 [1959-63]	中田 [1989]	摘要(筆者)
1	[S.2733]	pp.25-26	pp.9-10	p.2 (十三)	pls.25-26	●	pp.25-26	pp.94-97(一)	●		同疏, 『*義記』 惠業許 / 道周所集 (CE.508)
2	[S.4102]	p.26		p.2 (十二)	pls.27-28	●	pp.26-27	pp.94-97(二)	●		[S.37]とするのは誤り 〃, 『義記』第三 法順写記
3	[淡32]							p.107		p.355	六朝
4	[S.113v]								●		(CE.V)
5	[S.2463]				pls.31-32	●	p.27	pp.99-100	●		(CE.VI)
7	[玉26]							p.107		p.355	六朝
9	[暑70]							p.107		p.354	同本離片, (金[2013])
10	[S.2439]				pl.33 (I)	●	p.27	pp.100-101			〃
13	[S.2504]			p.4 (四十九)	pls.29-30	●	pp.27-28	pp.97-99	●		[S.2502]とするのは誤り 『法華論』一巻
14	[始53]							p.107		p.355	〃 (二訳混在)
16	[S.6789]								●		『義疏』巻第五 吉蔵法師撰 道義纘集
17	[S.4136]					●			●		[S.496]とするのは誤り 吉蔵『義疏』関連
18	[S.6891]								●		『義疏開題并玄義十門』 吉蔵法師撰
19	[致15]							p.107		p.355	慧淨『纘述』巻一
20	[S.6494]								●		『纘述』巻二~五の抄出
21	[S.4107]				pl.33 (II)	●	p.27	p.102			[S.520]とするのは誤り 『纘述』の抄出か
22	[菜11]							p.107		p.355	『纘述』関連か
23	[S.2662]					●		pp.102-105			〃,『*問答』
24	[S.1589]					●			●		慈恩基『玄贊』巻七
25	[S.2465]			p.1(五)		●			●		〃 巻一
28	[號66]							p.107		p.355	〃 巻一
29	[結43]							p.107		p.355	〃 巻一
30	[昃68]								●	p.355	〃 巻二
31	[黄12]								▲	p.355	〃 巻四
32	[河39]								▲	p.355	〃 巻四
48	[結48]									p.498	〃 巻一
44	[S.1358v]					●		pp.106-107			『*經抄』, 唐
47	[制49]							p.107		p.355	『*講經文』「序品」第一
49	[奈97v]									p.410	『*經節抄』巻第一
50	[芥81v]									p.413	『法華七禮文』, (汪娟[2008])
51	[字90]									p.498	『*雜釋』
-	[S.85-4-4]·[Ch.85 IX.4]			p.1(四)		●					法華章疏ではない 『妙法蓮華經』「陀羅尼品」
Total		2	1	4/5	6	11/12	6	17	14	16	矢吹:20点, 藤枝:14点, 中田:16点

〈付録III〉 兜木正亨・上山大峻・方廣錩博士等の関連論著及び写本出典一覧

No.1	No.2	写本番号	兜木[1978]	上山[1990]	方[1996]	方[1997A]	方[1998E]	方[1998F]	俄藏[1999]	院大[2006]	摘要(筆者)
1	–	[S.2733]	p.184			七(一)	七(1)	八(一)			惠業許 / 道周所集 (CE.508)
2	–	[S.4102]	p.184			七(二)	七(2)	八(二)			『義記』第三 法順写記
3	–	[淡32]					二十二	二十五			六朝
5	–	[S.2463]	p.184			三	四	四			[S.2460a]とするのは誤り (CE.VI)
6	–	[P.ch.3308]	p.220			八	八(A)	九(A)		p.143	利都釈『義記』第一巻 曇延許 (CE.536)
4	–	[S.113v]	p.185				八(B)	九(B)			(CE.V)
7	–	[玉26]				一(一)	十二(1)	二(一)			同一種経疏 (方[1997A])
9	–	[暑70]				一(二)	十二(2)	二(二)			〃
8	–	[P.ch.4567]	p.221				三(1)	三(1)		p.141	同本離片 (方[1998E])
10	–	[S.2439]	p.184			二	三(2)	三(2)			〃 (CE.VI)
–	52	[上博15 (3317)]			翻刻	九	十五	十			『法華經文外義』一巻 (CE.545) 惠龔写
–	53	[京博 B甲248]				十一	三十一	十一			『〝法華經疏[51]』一巻 (CE.566), 吐魯番出土
–	54	[散767]・[書博【047】]				十二	三十二	十二			『法華經王』 (CE.570) 曇爾撰
13	–	[S.2504]	p.183				一(1)	一(1)			『法華論』一巻
14	–	[始53]					二十	二十三			〃 (二訳混在)
–	55	[散697]				十	一(2)	一(2)			〃 (題記のみ, CE.528) 傅増湘旧蔵[52]

51) 【No.53】「二〇二　法華經疏　一卷 / 題名撰人は未詳。行文と書寫の方式はスタイン本法華疏(S.2430)に類する。五百弟子品より安樂行品まで存する。 / (奥書) / 延昌六年八月傳寫敎讀 / 李盛鐸の藏印がある。」(京博[1954]p.31)、「十一、≪法华经疏≫, 一卷。日本京都博物馆收藏。有尾题及题记：“**≪法华经疏≫一卷。延昌六年(566)八月传写教读。**”延昌是高昌的年号。本卷也可能是吐鲁番出土。因未见原件, 不知是否已经为历代大藏经所收, 或即为前面已经介绍的几种疏释之一。研究者或以为此题记的真实性可疑。」(方廣錩[1998F]p.48)参照。筆者未見。ちなみに[S.2430]は、表面『涅槃經疏』(仮題)、裏面『勝鬘經疏』(仮題)であり、法華疏ではない。[S.2439]の誤記か。

52) 【No.55】「(2)傅増湘旧藏, 现下落不明。尾有题记：“**大魏永安元年(528)岁次戊申十二月, 洛阳永宁寺译。执笔人比丘僧辩。**”又有题记云：“东魏大乘经论本, 开元五年(717)岁次己巳三月十四日写。”该号属哪一种译本, 现无法考证。」(方廣錩[1998F]p.45)参照。筆者未見。

No.1	No.2	写本番号	兜木 [1978]	上山 [1990]	方 [1996]	方 [1997A]	方 [1998E]	方 [1998F]	俄藏 [1999]	院大 [2006]	摘要(筆者)
15	–	[P.ch.2346]	p.221	●			十六	十九		p.102	吉藏『義疏』, (CE.VII), (吳建伟[2010])
16	–	[S.6789]	p.184				九(2)	十四(2)			『義疏』卷第五 吉藏法師撰 道義纘集
17	–	[S.4136]	p.184				九(3)	十四(3)			吉藏『義疏』関連
18	–	[S.6891]	p.185	●			九(1)	十四(1)			『義疏開題并玄義十門』 吉藏法師撰, (CE.VII)
19	–	[致15]					二十一	二十四			慧淨『纘述』卷一
20	–	[S.6494]	p.185				十	十五			『纘述』卷二～五の抄出
21	–	[S.4107]	p.184			四	五	五			『纘述』の抄出か
22	–	[菜11]		●			二十三	二十六			『纘述』関連か, (CE.VIII)
23	–	[S.2662]	p.185	●		六	六	七			〃,『 』問答』
27	–	[P.ch.3832]	p.221	●		五(C)	二(A)	六(1)		p.102	慈恩基『玄贊』卷一, 唐
48	–	[結48]		●		五(一)	二(B)	六(2)			〃 卷一
29	–	[結43]		●			二(C)	六(3)			〃 卷一, (CE.VIII)
–	56	[S.6474]					二(D)	六(4)			〃 卷一
25	–	[S.2465]	p.184	●							〃 卷一, 初唐
28	–	[號66]		●			二十四	二十七			〃 卷一, (CE.X)
–	57	[P.ch.4818]								p.102	〃 卷一, (CE.VIII?)
–	58	[凡x1060]								p.102	〃 卷一
30	–	[昃68]		●		五(二)	二(E)	六(5)			〃 卷二, (CE.VIII)
–	59	[北新746]				五(F)	二(F)	六(6)			〃 卷二, 筆者未見
–	60	[P.ch.4797]								p.102	〃 卷二, (CE.VIII?)
32	–	**[河39]**		●		五(三)	二(G)	六(7)			[河34]とするのは誤り 同本離片 (方[1997A]) 〃 卷四, (CE.VIII–)
31		**[黄12]**		●		五(四)	二(H)	六(8)			〃 卷四, (CE.VIII)
35	–	[散789]・[書博【100】]		●							〃 卷四, 8世紀中葉
–	61	[P.ch.4910]								p.102	〃 卷五, (CE.VIII)
26	–	[P.ch.2176]	p.221	●		五(A)	二(I)	六(9)		p.102	〃 卷六, (CE.VIII)
–	62	[上博附3 (34667)]				五(G)					〃 卷六, 唐
24	–	[S.1589]	p.184	●			二(J)	六(10)			〃 卷七, (CE.X)
34	–	[散782]・[書博【079】]				五(D)	二(K)	六(11)			〃 卷七, (CE.753)
36	–	[散790]・[書博【101】]		●							〃 卷八, 8世紀中葉

No.1	No.2	写本番号	兜木[1978]	上山[1990]	方[1996]	方[1997A]	方[1998E]	方[1998F]	俄藏[1999]	院大[2006]	摘要(筆者)
–	63	[北新910]				五(E)	二(L)	六(12)			〃 巻十，筆者未見
39	–	[S.3713v]	p.189	●							題記(序品第一)のみ
40	–	[P.ch.2118v]		●		五(B)					題記(巻第十)のみ
41	–	[P.ch.2159v]	p.224	●			三十	三十三		p.141	『玄贊科文』巻第二 詮明(CE.907–1125) 科定
42	–	[散791]・ [書博【099】]		●							慧沼(CE.648–714) 『玄贊義決』
43	–	[P.ch.2118r]	p.221	●			十七	二十		p.141	『明決要述』巻第四， (CE.VIII)
–	64	吉林省 博物館				十四	二十六	二十九			『玄贊』の末疏か[53]
–	65	[Дx15286]							p.377		『*經疏』「踊出品」 第十四，(CE.VI–VII)
–	66	[S.2700]					十八	二十一			『*經疏』，7世紀初期
–	67	[P.ch.4709]	p.221								『*經疏』「方便品」 (7a14)，唐
–	68	[Φ359]					十三	十七		p.143	『纘述』関連か・要検討 『*經疏』「嘱累～勸發品」
–	69	[Дx1556]							p.377		『*經疏』「普門品」， (CE.IX–XI)
–	70	[南図020]					二十七	三十			『*經疏』，筆者未見[54]
–	71	[京博 B甲273]				十三	三十三	十三			『法華經疏讃[55]』巻第一 王旻写 (CE.722)
44	–	[S.1358v]	p.185								『*經抄』，唐
–	72	[S.9439]	p.185								『*經抄』，唐
–	73	[S.5494]	p.189								題記(『法華経抄』 壱拾弐巻)のみ
45	–	[S.4298]	p.185				十一	十六			『*問答』，唐末

53)【No.64】「十四、佚名，東北某博物館藏，通卷章草，**係對窺基≪玄贊≫的復疏**。我國歷代經錄未予著錄，亦未爲歷代大藏經所收。」(方廣錩[1997A]p.224)、「二十九、≪妙法莲华经玄赞复疏≫，作者不详，原著卷数不详。藏于吉林省博物馆，无名题，现名系据内容所拟。通卷章草，系对窥基≪玄赞≫的复疏。未为历代大藏经所收。」(方廣錩[1998F]p.50)参照。筆者未見。

54)【No.70】「三十、≪妙法莲华经疏≫，作者不详，原著卷数不详。南京图书馆藏。首残尾全，无名题，现名系据内容所拟。未为历代大藏经所收。」(方廣錩[1998F]p.50)参照。

No.1	No.2	写本番号	兜木[1978]	上山[1990]	方[1996]	方[1997A]	方[1998E]	方[1998F]	俄藏[1999]	院大[2006]	摘要(筆者)
–	74	[P.ch.3406]	p.221							p.141	『*字音』, 唐
–	75	[北新998]					十四	十八			『法花文記』巻第一, 筆者未見
51	–	[字90]					二十五	二十八			『*雜釋』
47	–	[制49]					二十八(1)	三十一(1)			『*講經文』「序品」
–	76	[Φ365]					二十八(2)	三十一(2)		p.141	〃「藥王品」, (劉靜宜[2006])
–	77	[Φ365V]					二十八(3)	三十一(3)		p.141	〃「普門品」
–	78	[P.ch.2133]					二十八(4)	三十一(4)			〃「普門品」, (釋大參[2007])
–	79	[P.ch.2305]	p.222				二十九	三十二		p.141	〃「提婆品」, (黃國清[2007]), 現代語訳 (松尾[1992])
–	80	[P.ch.3023]	p.222								斷從呈上『*讃文』, 唐
–	81	[P.ch.3600-1]	p.207							p.141	『*讃文』, 唐末
–	82	[P.ch.3120]	p.222								『法華経廿八品讃』, 唐
–	83	[S.189v]	p.187								品題列記・廿八品, 唐末以降
–	84	[S.2092]	p.187								品題列記・卅品, 〃
–	85	[P.ch.3316]					十九	二十二(1)			同本離片, 『*經疏』
–	86	[P.ch.3387]					十九	二十二(2)			〃, 要検討
–	–	[P.ch.3898]	p.223								法華章疏ではない『大唐内典録』, (张先堂[1990]・金[2009])
Total			34/35	21	1	26	55	55	2	17	兜木：34点, 上山：21点 方：55点

55)【No.71】「二三一　法華經疏讃　卷第一殘卷　一卷 / (奥書) / 開元十年三月四日佛弟子王旻」敬寫法華經疏讃一部　供養 / 李盛鐸の藏印がある。」(京博[1954]p.35)参照。筆者未見。

〈付録Ⅳ〉各種資料中の敦煌出土法華章疏写本出典一覧

No.2	写本番号	中書[2007]	散蔵[2007]	妻木[1911]	龍図[1936]	秘笈[2009-]	齋藤[2012]	摘要(筆者)
87	[敦博〇五四]		p.31					女排去録『*經節抄』「法師功德品」，(CE.641)
88	[故宮 新137368]		p.68					『玄贊』巻五，(『故宮』p.175)，筆者未見
89	[故宮 新138065]		p.68					〃 巻二～四，(『故宮』p.176)，筆者未見
90	[故宮 新150679]		p.69					〃 巻二，(『故宮』p.177)，筆者未見
91	[上図183(827457)A]		p.69					『*經疏釋』，南北朝
70	[南図020]		p.69					『*經疏』，南北朝(6世紀)，(『南図』pp.139-140)，筆者未見
52	[上博15(3317)]		p.69					『文外義』一巻，西魏(CE.545)，(菅野[2006])
92	[北大D143]		p.69					『*經釋』「莊嚴～勸發品」，唐
93	[北大D183V]		p.69					『*經釋』「方便～譬喩品」
94	[津藝304(77・5・4643)]		p.69					吉蔵『義疏』の異本か『*義疏』(491b-503c)，唐
95	[北大D222]		p.69					『*經疏』「不輕品」，唐
96	[津図044]		p.69					『*經疏』，筆者未見
97	[津図046]		p.69					〃
98	[津図094]		p.69					〃
99	[津藝244(77・5・4583)]		p.69					慧淨『讚述』関連か・要検討『*經疏』唐
100	[上博12(3303)]		p.69					『法華經疏』巻第二，唐
101	[中研院27]		p.69					「法華經疏第三方便品第二之一」，筆者未見
102	[中研院28]		p.69					「法華義記」，筆者未見
103	[重博6]		p.76					『*妙法蓮華經目録』，[P.3406]と同種，(『重博』p.122)，筆者未見
62	[上博附3(34667)]		p.99					『玄贊』巻六
104	汪大燮所有本			pp.364-365				『*法華經玄賛義釋』，宋初，筆者未見
105	[龍図一一一]				p.49			『*經疏』，「方便～譬喩品」，梁
106	[羽一一]					①，p.116		光遠写記『法花行儀』，(CE.732)，(落合[2002])
107	[羽三三一]					④，p.497		吉蔵『義疏』(632a9)と近似するも一部不一致
108	[羽五八九ノ五]					⑧		筆者未見
109	[羽五八九ノ六]					⑧		筆者未見
110	[S.2546]						●	『*玄贊鈔』
–	[中書ZSD046]	p.11						法華章疏ではない『佛性觀修善法』，(ZW.9 no.72 pp.34a24-35a1)
Total		0/1	20	1	1	4	1	

〈付録V〉各種資料中のトルファン出土法華章疏写本出典一覧

No.2	写本番号	BT. [1975]	百濟 [1999]	出口 [2005]	百濟 [1992]	図譜 [1915]	旅順 [2006]	摘要(筆者)
33	[Ch1215r]	p.181						『玄贊』巻六
111	[M7860(T II Y 34)]		p.14					『妙法蓮華經』の注釈「五百弟子受記品」(28a12-17), 唐, 筆者未見
112	[M7861(T II Y 34)]		p.14					(28b18-23), 〃
113	[M7862(T II Y 34)]		p.14					(28b25), 〃
114	[一二七甲 (Pl.XIX C2)]			p.50				同本離片 『*法華經解』「化城喩品」, 北朝・6世紀前半
115	[一二七乙(Pl.XX C3)]			p.51				〃
116	[三二二甲 (Pl.LV B36)]			p.191				同本離片, 『*法華經注』, ウイグル期, 道暹(CE.-818-) 『法華天台文句輔正記』(648c11)に類似文例あり
117	[三二二乙 (Pl.LV A23)]			p.192				〃
118	[三二二丙 (Pl.LV A23)]			p.192				〃
119	[三二四(Pl.LV A24)]			p.192				〃
120	[三二七(Pl.LVI A26)]			p.196				『*法華玄贊疏』(「序品」か), ウイグル期
121	[I.U.No.22V(c)+(d)]				p.143			『*法華經音』, 11世紀後半以降, (高田[1985]・金[2012a])
122	[LM20_1520_15_07]						p.67	湛然(CE.711-782) 『法華玄義釋籤』(905a7-10)
123	[LM20_1491_04_02]						p.101	『妙法蓮華經』(含注釈), 「譬喩品」(11a22-28), 唐
124	[LM20_1477_23_01]						p.101	『妙法蓮華經』(含注釈), 「譬喩品」(11b16-21), 唐
125	[LM20_1481_11_06]						p.105	『妙法蓮華經』(含注釈), 「寶塔品」(32c22-24), 唐
126	[LM20_1469_11_03]						p.108	不明(『法華經』注釈), 唐～ウイグル期
127	[LM20_1469_11_04]						p.108	不明(『法華經』注釈), 唐～ウイグル期
128	[LM20_1503_221]						p.110	『妙法蓮華經』(含注釈), 「普門品」(57a14-17), 唐
129	[LM20_1453_19_02]						p.167	不明(『法華經』注釈), 高昌国末期～唐
130	[LM20_1457_18_03]						p.167	不明(『法華經』注釈), 唐～ウイグル期
131	[LM20_1469_11_01]						p.179	不明(『法華經』注釈), ウイグル期
132	[LM20_1457_15_01]						p.201	『玄贊』関連, 唐
133	[LM20_1467_28_03]						p.209	同本離片 『法花義記』巻一, 唐～ウイグル期
134	『図譜』下 佛典(51)					p.2		〃, 隋唐間寫, (庫車出土)
Total		1	3	7	1	1	12	

〈参考資料I〉III①[S.2463]の翻刻

〈凡例〉

＊ 翻刻史料は東洋文庫の所蔵するマイクロフィルムからの紙焼き(pls.28−31)を底本とした。

＊ 翻刻原文の註は該当語の最初に付した。なお、翻刻原文に用いた符号は以下のとおり。

「S.2463_P.31_53(28)」— [S.2463 — スタインコレクションナンバー、_P.31 — 紙焼きの頁数、_53 — 全53行中53行目、(28) — 一行の文字数]　□ — 欠損・破損のために判読できない文字。　○ — 筆者には判読できない文字(異体字など)。　[…] — 筆者による誤字・脱字の補填。　{…} — 書写・校閲者による添字　レ — 書写・校閲者による返り点。々 — おどり字(補って記した)。

＊ 翻刻原文に用いた下線は、『妙法蓮華經』との対応関係(一回、二回以上)及び論疏との類似文例を示す。なお、句読点・**太字**(科段・異解・主要用語)は筆者の任意による。

S.2463_P.29_01(30)：[56]命也。[?]失解以來爲生死[?]所枸可慇之[甚]悳爾時苦有可斷之增。故言[57]苦惱如是。依

S.2463_P.29_02(31)：十二部經以之爲方。敎所宜之理。能除[惑]或患。故名好藥。又**一解**。依道根以爲依方

56) 首欠。

57) 『妙法蓮華經』「如來壽量品」に「父見子等苦惱如是。依諸經方。求好藥草色香美味皆悉具足。擣❸篩和合與子令服。而作是言。此大良藥。色香美味皆悉具足。汝等可服。速除苦惱無復衆患。」【T.9 p.43 脚註❸】「篩＝篩㊀㊁㊂㊃㊄㊅(敦丙)」(T.9 no.262 p.43a, *ll*.14−18)とある。

S.2463_P.29_03(28)： 稱根之教名好藥**二乘理教**俱備。故皆悉具足也。實智析觀窮虛有微到

S.2463_P.29_04(29)： 之氣名之爲偈[揭]方便智簡三[?][?]底就精當彼根性曰達{薩}辭辨幾レ應名和合。教被

S.2463_P.29_05(28)： 前人。故與レ言子令服。歎**二乘理教藥**[?]患中勝。故言良藥。理教俱備名悉具

S.2463_P.29_06(28)： 足。若能**順教脩行**斷除生死。故言速除苦惱無復衆患。[58]其諸子中。起或[惑]輕

S.2463_P.29_07(30)： 微。一刑之中不鄣聖道。故言不失心也。現在**順教脩行**得理味資神。故言卽便

S.2463_P.29_08(31)： 服之。斷三界或[惑]盡。故言病盡除偸[愈]。起或[惑]重者。一刑之中不得聖道。故言餘失心也。

S.2463_P.29_09(28)： 雖遠感於貎[?]〇[々]者。順其幾淸。故言歡喜問訊。幾感理教。故言求索恃[治]病也。

S.2463_P.29_10(30)： 起或[惑]處深不能**順教脩行**。故言不肯服也。所以然與其藥而不肯服者。何起或[惑]

S.2463_P.29_11(28)： 處深弱鄣聖解。故言毒深[氣]深入失本故レ心也。雖塵沙五教薄飡露嚮[?][?][?]佉不

58) 『妙法蓮華經』「如來壽量品」に「其諸子中不失心者。見此良藥色香俱好。卽便服之病❹盡除愈。餘失心者。見其父來。雖亦歡喜問訊求索治病。然與其藥而不肯服。所以者何。毒氣深入失本心故。於此好色香藥而謂不美。」【T.9 p.43 脚註❹】「盡＝卽傳」(T.9 no.262 p.43a, *11*.18−23)とある。

S.2463_P.29_12(29)：深神。故言而謂不美也。[59]父作是念以下。**第三**與未來方便爲喩。現在値過良

S.2463_P.29_13(29)：[?]緣不[縱]〇聖道。故言可愍鄣。於{聖}解。故名爲毒所中。着有着無不會中道。不能

S.2463_P.29_14(29)：**順教脩行**。故言心皆顚倒。幾感於聖。故言見我喜也。雖復遠滅於教現在。不

S.2463_P.29_15(29)：能**順教脩行**。故言而不肯服。當設方便者。唱滅方便。唱滅方便{生}善。故言令服此

S.2463_P.29_16(29)：藥。將滅鄣不久名死時至レ已。所有之[?][付]法府囑摩訶迦葉。故言今留在此。若能

S.2463_P.29_17(29)：**順教脩行**。斷除煩惱。故言勿憂不差。感緣既盡滅鄣歸眞名至他國。如來入

S.2463_P.29_18(29)：涅槃時諸天在虛空。唱告今日中處當入涅槃。遣レ名{[60]其}使。不在會者皆得聞之。

S.2463_P.29_19(31)：故言使還告汝父已死。更又**一解**。夫使本表命[?]枚取利レ舍天上人中起八萬四**千**

S.2463_P.29_20(28)：**塔**。表如來滅度之相。故言遣使還告汝父已死。如來滅後[?]然感[?]儻歎。故言

---

59)『妙法蓮華經』「如來壽量品」に「父作是念。此子可愍。爲毒所中心皆顚倒。雖見我喜求索救療。如是好藥而不肯服。我今當設方便令服此藥。卽作是言。汝等當知。我今衰老死時已至。是好良藥今留在此。汝可取服勿憂不❺差。作是教已復至他國。遣使還告。汝父已死。」【T.9 p.43 脚註❺】「差＝美㊀㊁, ＝癌㊂」(T.9 no.262 p.43a, *ll*.23-28)とある。

60) 添字「其」は、墨色の濃淡や書体が異なることから、後から別人によって書き込まれた文字と判断される。よって文字数には含まなかった。

S.2463_P.30_21(28)：[61]心大憂惱。如來在世慈育。於我名見救護。今者。滅[?]應歸眞。故言捨我遠喪

S.2463_P.30_22(30)：他國。故言如來滅後[?]洛稟無所。故言無復恃怙。如來滅後像正之中。**順教脩行**

S.2463_P.30_23(31)：得聞恩惠解。故言心遂醒悟。得{理}在心斷除三除レ界[惑]或盡。故名毒病皆[愈]愈。既道[?]成

S.2463_P.30_24(29)：羅漢大感幾着感聖出世。故言咸使見之。[62]於意云何以下。[?][愈]舍愈是良藥レ醫實。

S.2463_P.30_25(30)：自不死爲子服藥唱言死者有。虛妄罪不。不也尊レ世。罪爲虛忘。何以罪虛虛忘

S.2463_P.30_26(34)：之法。說無益之言。令人遂レ踊可言是虛。如來亦不爾此{因非}唱[?]滅方便像正之中得道塵

S.2463_P.30_27(27)：沙大[?]想得實益。何虛之有亦無有人如世間虛妄之法說我虛妄過者。

---

61)『妙法蓮華經』「如來壽量品」に「是時諸子聞父背喪。心大憂惱而作是念。若父在者。慈愍我等能見救護。今者捨我遠喪他國。自惟孤露無復恃怙。常懷悲感。心遂醒悟。乃知此藥色❻味香美。卽取服之毒病皆愈。其父聞子悉已得差。尋便❼來歸咸使見之。」【T.9 p.43 脚註❻】「味香美＝香美味㊀㊁㊂教」【T.9 p.43 脚註❼】「來歸＝歸來㊃」(T.9 no.262 p.43a, *l*.28 – p.43b, *l*.5)とある。

62)『妙法蓮華經』「如來壽量品」に「諸善男子。於意云何。頗有人能說此良醫虛妄罪不。不也世尊。佛言。我亦如是。成佛已來。無量無邊百千萬億那由他阿僧祇劫。爲衆生故。以方便力言當滅度。亦無有能如法說我虛妄過者。」(T.9 no.262 p.43b, *ll*.6–10)とある。

S.2463_P.30_28(30)：[63]偈頌中初一偈頌。[64]前劫數。次有四偈頌。過去方便。就初一偈頌。前自從是來。我

S.2463_P.30_29(31)：常在此娑婆世界。乃至常說法教化。道[導]利衆生。

---

63)『妙法蓮華經』「如來壽量品」に「爾時世尊欲重宣此義。而說偈言　自我得佛來　所經諸劫數　無量百千萬　億載阿僧祇　常說法教化　無數億衆生　令入於佛道　爾來無量劫　爲度衆生故　方便現涅槃　而實不滅度　常住此說法　我常住於此　以諸神通力　令顚倒衆生　雖近而不見　衆見我滅度　廣供養舍利　咸皆懷戀慕　而生渴仰心　衆生旣信伏　質直意柔軟　一心欲見佛　不自惜身命　時我及衆僧　俱出靈鷲山　我時語衆生　常在此不滅　以方便力故　現有滅不滅　餘國有衆生　恭敬信樂者　我復於彼中　爲說無上法　汝等不聞此　但謂我滅度　我見諸衆生　沒在於苦惱　故不爲現身　令其生渴仰　因其心戀慕　乃出爲說法　神通力如是　於阿僧祇劫　常在靈鷲山　及餘諸住處　衆生見劫盡　大火所燒時　我此土安隱　天人常充滿　園林諸堂閣　種種寶莊嚴　寶樹多花❽菓　衆生所遊樂　諸天擊天鼓　常作衆伎樂　雨曼陀羅花　散佛及大衆　我淨土不毁　而衆見燒盡　憂怖諸苦惱　如是悉充滿　是諸罪衆生　以惡業因緣　過阿僧祇劫　不聞三寶名　諸有修功德　柔和質直者　則皆見我身　在此而說法　或時爲此衆　說佛壽無量　久乃見佛者　爲說佛難値　我智力如是　慧光照無量　壽命無數劫　久修業所得　汝等有智者　勿於此生疑　當斷令永盡　佛語實不虛　如醫善方便　爲治狂子故　實在而言❾死　無能說虛妄　我亦爲世父　救諸苦患者　爲凡夫顚倒　實在而言❿滅　以常見我故　而生憍恣心　放逸著五欲　墮於惡道中　我常知衆生　行道不行道　隨❶所應可度　爲說種種法　每自作是意　以何令衆生　得入無上❷慧　速成就佛身」【T.9 p.43 脚註❽】「菓＝果㊀宮敎(敦丙)」【T.9 p.43 脚註❾】「死＝化敎(敦方)」【T.9 p.43 脚註❿】「滅＝死敎(敦丙)」【T.9 p.44 脚註❶】「所應＝應所敎(敦丙)」【T.9 p.44 脚註❷】「慧＝道(敦丙)」(T.9 no.262 p.43b, *l*.10 – p.44a, *l*.4)とある。

64)『妙法蓮華經』「如來壽量品」に「爾時佛告大菩薩衆。諸善男子。今當分明宣語汝等。是諸世界。若著微塵及不著者。盡以爲塵一塵一劫。我成佛已來。復過於此百千萬億那由他阿僧祇劫。自從是來。我常在此娑婆世界說法教化。亦於餘❻處百千萬億那由他阿僧祇國導利衆生。諸善男子。於是中間。我說❼燃燈佛等。又復言其入於涅槃。如是皆❽以方便分別。諸善男子。若有衆生來至我所。我以佛眼。觀其信等諸根利鈍。隨所應度。處處自說名字不同年紀大小。亦復現言當入涅槃。又以種種方便說微妙法。能令衆生發歡喜心。諸善男子。如來。見諸衆生樂於小法德薄垢重者。爲是人說。我少出家得阿耨多羅三藐三菩提。然我實成佛已來久遠若斯。但以方便教化衆生。令入佛道作如是說。……諸所言說皆實不虛。」【T.9 p.42 脚註❻】「處＝威宮」【T.9 p.42 脚註❼】「燃＝然(敦丙)」【T.9 p.42 脚註❽】「以＝已傳*」(T.9 no.262 p.42b, *l*.22 – p.42c, *l*.9, *l*.12)とある。

次一偈頌。我於中間說燃燈佛等。

S.2463_P.30_30(31)：次一偈。長行始偈中廣略。如來在於淨土穢土二土。衆生所不見也。次後一偈頌。

S.2463_P.30_31(31)：上處處[ヵ]自說名字不同。乃至入於涅槃。衆生既信伏一偈半頌。現在方便從樂

S.2463_P.30_32(30)：於小法。乃至皆實不虛。我時語衆生半偈頌。[65]前我於阿僧祇劫。常住不滅。以方

S.2463_P.30_33(31)：便力故三偈半頌。上來來方便。神通力如是五偈頌。上淨穢二土。雖德[?]土現滅。淨

S.2463_P.30_34(31)：土常存。是諸罪衆生一偈。見如來在穢土也。諸有脩功德一偈。福衆生見佛在於

S.2463_P.30_35(28)：淨土。或時爲此衆半偈。爲福德衆生說佛長壽。次半偈久乃見佛者。明薄

S.2463_P.30_36(29)：德人。說佛難値我智力如是半偈。釋何由罪福衆生感見淨穢二土。正以我

S.2463_P.30_37(31)：智力如是故所以能爾。壽命無數劫半偈頌。前復倍上數。次一偈頌上第六引

S.2463_P.30_38(25)：證。如醫善方便一偈頌。良醫。亦爲世父四偈頌。合喩。　**分別功德品**

S.2463_P.30_39(30)：此品何由而與。上來廣略**二周說法**。顯明法身常住大衆於常住理中。得生死

S.2463_P.30_40(30)：相眞解解[ヵ]心既生。更有勝進雖知異得。未知得之

---

65)『妙法蓮華經』「如來壽量品」に「如是我成佛已來⑭甚大久遠。壽命無量阿僧祇劫常住不滅諸善男子。我本行菩薩道所成壽命。今猶未盡復倍上數。」【T.9 p.42 脚註⑭】「甚＝其㊥」(T.9 no.262 p.42c, *ll*.19−23)とある。

齊畔多少。宜順如來分別令

S.2463_P.31_41(31) ： 彼迥灼[?]。故名分別。上因經**三周說法**。三根同悟列記。方將{行因}之近。卽是分別。今

S.2463_P.31_42(28) ： 聞壽量解有深淺。故更**順分別**。復有**一解**。上因經爲於聲聞小行菩薩。**破**

S.2463_P.31_43(29) ： **三歸一**事相。底[?]淺大士無益。故**不順分別**。今聞常住大果增其勝解就增解

S.2463_P.31_44(30) ： 之處分別功德多少知其畔レ齊其心決定。故**順分別**。更有**一解**。此經始終通爲

S.2463_P.31_45(29) ： 一乘但[66]**因乘**。理敎不備。解心不滿。增道不顯。**不爲分別**。今明**果乘**。理敎俱備。

S.2463_P.31_46(28) ： 解心○[菊][昱]○。增道儀顯。故**順分別**。此品凡有**三品分別**。從[67]初住至六住**下品**

S.2463_P.31_47(32) ： 分別。七住一地**中品**分別。從住レ八至十住**上品**分別。與**下品**分別凡有二意。一聞下

S.2463_P.31_48(30) ： 品之人雖上聞說壽量。於中生無相眞解解[々]心旣生。不知得之齊畔多少。故**順**

S.2463_P.31_49(31) ： **分別**。二意若不與下品分別住前三信無以發[?]心成

66) 寶亮(CE.444−509)等集『大般涅槃經集解』巻第十に「昔法華所辨乘果。由是無常。卽是**果乘**不備也。因中旣無解常之智。故**因乘**不滿也。唯此經體。明因果足。故言純備也。」(T.37 no.1763 p.425c, *ll*.4−7)と類似する文例が見られる。

67) 『法華義記』(＝[S.2733]・[S.4107])「法師品」に「凡有五種菩提。一者住前性地。深伏煩惱。於其勝理。未究竟解。名發心菩提。初住至六住無漏在懷。伏心於理。名伏心菩提。七住菩薩。三界惑盡。見理喩明。名明菩提。八住至十住。永離愛結。入法流水。名出到菩提。」(T.85 no.2748 p.174c, *ll*.11−16)とあり初住より十住までの枠組みを同じくする文例が見られる。

就。正由與**下**{**品**}分別三信之

S.2463_P.31_50(29)：人。信心强固故**順分別**也。與**中品**分別有其三意。一上聞說壽量增進勝解

S.2463_P.31_51(29)：中品之人[?]麤處以[?]進細處未能分別多少明要順如來分別知其齊畔甚心

S.2463_P.31_52(28)：[?]迥灼。二意中品之人所得惠勝欲使下品之人仰慕於中。三意欲使厲於

S.2463_P.31_53(29)：[68]~~□□□中品分別分別上品品有三意所解□□□中□□□□□盡恩明~~[69]

以上、III①[S.2463]の翻刻を終える。

68) 53行目は縦一行が真ん中で切断(□□)されているため、わずかに文字数を推定しうるのみである。

69) 以下欠。ちなみにこの写本では「其」・「愈」・「斷」・「歸」の字に対して極めて特徴的な異体字が用いられている。

略　語

CE.	Common era(共通年代)
T.	『大正新脩大藏經』
T.in	『大正新脩大藏經索引』
SZ.	『新纂大日本續藏経』
ZW.	『藏外佛教文獻』
Kor.206	『松廣寺妙法蓮華經纘述』巻一・二　松廣寺聖宝博物館藏本(宝物 第206号)
Kor.1468	『松廣寺妙法蓮華經纘述』巻五・六　松廣寺聖宝博物館藏本(宝物 第1468号)「r(recto)」綴じ本の右側の頁(表)⇔「v(verso)」
S.	大英図書館所藏スタインコレクション(Stein No.)
P.	フランス国立図書館所藏ペリオコレクション(Pelliot chinois No.)
BD	北京図書館(現、中国国家図書館)藏敦煌遺書(マイクロフィルム番号)
BT.	“Katalog Chinesischer Buddhistischer Textfragmente”
BnF	“Catalogue des Manuscrits chinois de Touen-Houang”
Giles	“Descriptive catalogue of the Chinese manuscripts from Tunhuang in the British Museum”
敦博	『敦煌市博物館藏敦煌文獻』
故宮	故宮博物院 [北京] (「故宮博物院藏敦煌吐魯番文献目录」)
上図	『上海圖書館藏敦煌吐魯番文獻』
南図	南京圖書館(「南京图书馆所藏敦煌遗书目录」)
北大	『北京大學圖書館藏敦煌文獻』

津藝	『天津市藝術博物館藏敦煌文獻』
津図	天津圖書館(『敦煌吐魯番研究』第8卷所収)
中研院	中央研究院［臺北］(『庆祝吴其昱先生八秩华诞敦煌学特刊』所収)
上博	『上海博物館藏敦煌吐魯番文獻』
重博	重慶市博物館(「重庆市博物馆藏敦煌吐鲁番写经目录」)
散	「敦煌遺書散錄」(『敦煌遺書總目索引』所収)
中書	『中國書店藏敦煌文獻』
旅順	『旅順博物館藏トルファン出土漢文仏典断片選影』
俄藏	『俄藏敦煌漢文寫卷叙録』
秘笈	『敦煌秘笈』
院大	『大正蔵·敦煌出土仏典対照目録』
龍図	龍谷大学図書館蔵大谷探検隊将来敦煌古写経(『龍谷大學圖書館善本目録』)
出口	出口常順藏トルファン出土佛典(『トルファン出土仏典の研究 高昌残影釈録』)
京博	京都国立博物館(『宸翰古經目錄 守屋コレクション』)
書博	『台東区立書道博物館所蔵中村不折旧蔵禹域墨書集成』
図譜	『西域考古圖譜』
解説	『鳴沙餘韻解説 燉煌出土未傳古逸佛典開寶』
宝蔵	『敦煌寶藏』
佛解	『佛書解説大辭典』

参 考 文 献

上山大峻稿[1979]「唐代仏典の西域流伝の一面『法華玄賛』の出土写本をめぐって」{唐代史研究会編[1979]『隋唐帝国と東アジア世界』(汲古書院、東京、pp.455−467)}

上山大峻著[1990]『敦煌佛教の研究』(法藏館、京都、pp.366−374)

于淑健著[2012]『語言科技文庫・古代漢語學研究系列 敦煌佛典語詞和俗字研究』(上海古籍出版社、上海)

汪娟稿[2008]「法华七礼文」(『藏外佛教文献』2008−1、pp.177−192)

王素，任昉，孟嗣徽稿[2006]「故宫博物院藏敦煌吐鲁番文献目录」(『敦煌研究』2006−6、pp.173−182)

岡部和雄稿[1984]「敦煌蔵経目録」{牧田諦亮，福井文雅責任編集[1984]『講座敦煌7 敦煌と中国仏教』(大東出版社、東京、pp.297−317)

小田義久稿[1989]「敦煌三界寺の『見一切入蔵経目録』について」(『龍谷大學論集』434/435、pp.555−576)

落合俊典稿[2002]「李盛鐸旧蔵開元廿三年写『法花行儀』初探」{高田時雄編[2002]『草創期の敦煌學 羅・王兩先生東渡90周年記念日中共同ワークショップの記録』(知泉書館、東京、pp.203−224)}

兜木正亨編[1978]『スタイン，ペリオ蒐集敦煌法華経目録』(霊友会、東京)

菅野博史稿[1991]「光宅寺法雲『法華義記』と敦煌写本『法華義記』との比較研究」(『印度學佛教學研究』40−1、pp.46−51)；菅野博史著[1994]『中国法華思想の研究』(春秋社、東京、pp.235−244)

菅野博史稿[2006]「『法華経文外義』研究序説」(『印度學佛教學研究』55−1、pp.499−492)；菅野博史著[2012]『南北朝・隋代の中国仏教思想研究』(大蔵出版、東京、pp.165−177)

金炳坤稿[2008]「敦煌漢文文献「法華経疏」に関する一考察(経過報告)」{立正大学仏教学部編[2008]『ヨーロッパ仏教学の源流と比較文化研修(平成19年度地域仏教研究(三)Ｂ報告書；第6冊)』(立正大学仏教学部、東京、pp.9−13)}

金炳坤稿[2009]「僧肇記「法華翻経後記」偽撰説の全貌と解明」(『佛教學論集』27、pp.29−55)

金炳坤稿[2010]「紀国寺慧浄の『法華経纘述』考(1) 新発見の史料をもとに」(『身延論叢』15、pp.109−146)

金炳坤稿[2011]「法華章疏における五分釈の展開」(『印度學佛教學研究』59−2、pp.83−86)

金炳坤稿[2012a]「イスタンブール大学図書館所蔵「法華経音」について」{立正大学仏教学部編[2012]『オリエント・ヘレニズム比較文化研修(平成23年度地域仏教研究(三)Ｂ報告書；第10冊)』、(立正大学仏教学部、東京、p.67)}

金炳坤稿[2012b]「紀国寺慧浄の『法華経纘述』考(2) 韓国の現存本をもとに」(『身延論叢』17、pp.33−91)

金炳坤稿[2013]「六朝古逸『法華経疏』の同本離片に関する一考察」(『身延論叢』18、pp.31−96)

百濟康義稿[1992]「イスタンブール大学所蔵の東トルキスタン出土文献 特にその出所について」(『東方学』84、pp.148−137)

百濟康義稿[1999]「マインツ資料目録 旧西ベルリン所蔵中央アジア出土漢文仏典資料」(『龍谷紀要』21−1、pp.1−23)

古泉圓順稿[1986]「慧遠「法花経義疏」写本」(『四天王寺国際仏教大学紀要.文学部』19、pp.19−41)

胡垚稿[2010]「敦煌本≪法华义记≫考辨」(『敦煌学辑刊』2010−1、pp.44−50)

[=[S.2733]・[S.4102]・[P.3308]]
黄國清稿[2007]「敦煌伯2305號≪妙法蓮華經講經文≫的講經體例與思想特色」(『新世紀宗教研究』2007-3、pp.1-36)
吴建伟稿[2010]「≪大正藏≫本≪法华义疏≫校疑十七例：以P.2346号为对校本」(『图书馆杂志』2010-9、pp.74-77)
齋藤智寛稿[2012]「法相宗の禪宗批判と眞諦三藏 敦煌文書スタイン二五四六『妙法蓮華經玄贊鈔(擬)』と『眞諦沙門行記』」{船山徹編[2012]『眞諦三藏研究論集』(京都大學人文科學研究所、京都、pp.303-344)}・〔http://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/bitstream/2433/156062/3/Paramartha.pdf〕
佐藤哲英著[1981]『続天台大師の研究 天台智顗をめぐる諸問題』(百華苑、京都、pp.269-280)
释大参稿[2007]「敦煌P.2133v≪妙法莲华经讲经文≫之内容与思想」(『敦煌学辑刊』2007-4、pp.77-96)
高田時雄稿[1985]「ウイグル字音考」(『東方学』70、pp.150-134)
张先堂稿[1990]「伯·三八九八残卷篇名、作者新探—敦煌遗书研读札记」(『社科纵横』1990-6、pp.48-50)
妻木直良稿[1911]「燉煌石室五種佛典の解説」(『東洋学報』1-3、pp.350-365)
野村耀昌稿[1965]「中国文化と法華鑽仰史の連関 敦煌壁画及び敦煌文書を中心として」{坂本幸男編[1965]『法華経の思想と文化 / 法華経研究1』(平楽寺書店、京都、pp.97-127)}
潘重规等著[2000]『庆祝吴其昱先生八秩华诞敦煌学特刊』(文津出版社、北京)
①平井宥慶稿[1977a]「敦煌本法華疏三本と吉蔵撰法華疏」(『豊山学報』22、pp.51-72)

②平井宥慶稿[1977b]「曇曠と法華経疏」(『印度學佛教學研究』25-2、pp.229-233)
③平井宥慶稿[1977c]「敦煌本・法華経疏の諸相」(『豊山教学大会紀要』5、pp.62-75)
④平井宥慶稿[1978a]「敦煌本・初期法華経疏」(『印度學佛教學研究』26-2、pp.800-803)
⑤平井宥慶稿[1978b]「敦煌本・北朝期法華経疏類系譜」(『豊山学報』23、pp.105-124)
⑥平井宥慶稿[1979]「敦煌資料より知られる吉蔵の思想」(『印度學佛教學研究』27-2、pp.272-277)
⑦平井宥慶稿[1981a]「竺道生撰『法華経疏』の古形逸文」(『三康文化研究所年報』13、pp.21-31)
⑧平井宥慶稿[1981b]「敦煌本・北朝期法華経疏と他経疏」(『印度學佛教學研究』29-2、pp.259-264)
⑨平井宥慶稿[1981c]「敦煌本『法華経義疏開題并玄義十門』」{勝又俊教博士古稀記念論文集刊行会編[1981]『大乗仏教から密教へ 勝又俊教博士古稀記念論集』(春秋社、東京、pp.839-858)}
⑩平井宥慶稿[1985]「敦煌本『法花経義疏(巻第五)吉蔵法師撰 道義纘集』(一)」(『豊山学報』30、pp.85-96)
⑪平井宥慶稿[1986]「敦煌本『法花経義疏(巻第五)吉蔵法師撰 道義纘集』(二)」(『大正大學研究紀要. 佛教學部・文學部』72、pp.45-54)
⑫平井宥慶稿[1991]「無名の『法華経』研究者たち」{塩入良道先生追悼論文集刊行会編集[1991]『天台思想と東アジア文化の研究 塩入良道先生追悼論文集』(山喜房仏書林、東京、pp.373-382)}
⑬平井宥慶訳[1992a]「法華義記第三(抄)」{長尾雅人, 柳田聖山, 梶山雄

一監修[1992]『大乘仏典 中国・日本篇 第10巻 敦煌I』(中央公論社、東京、pp.319−338)}

⑭平井宥慶訳[1992b]「法華経義記(抄)」{長尾雅人，柳田聖山，梶山雄一監修[1992]『大乘仏典 中国・日本篇 第10巻 敦煌I』(中央公論社、東京、pp.339−346)}

⑮平井宥慶稿[1993]「敦煌文献よりみた『法華経』研究」{田賀龍彦編[1993]『『法華経の受容と展開 / 法華経研究12』(平楽寺書店、東京、pp.639−678)}

⑯平井宥慶稿[2000]「敦煌本『法花経義疏 吉蔵法師撰 道義纘集』」{平井俊栄博士古稀記念論文集刊行会編[2000]『三論教学と仏教諸思想 平井俊榮博士古稀記念論集』春秋社、東京、pp.253−263)

方广锠稿[1992]「吐鲁番出土汉文佛典述略」(『西域研究』1992−1、pp.115−127)

方廣錩主編[1996]『藏外佛教文獻』第2輯(宗教文化出版社、北京、pp.293−354)・(CBETA Chinese Electronic Tripiṭaka Collection Version April 2011, ZW02n0020)

方廣錩稿[1997A]「敦煌遺書中的≪妙法蓮華經≫及有關文獻」(『中華佛學學報』10、pp.211−232)・〔http://www.chibs.edu.tw/ch_html/chbj/10/chbj1008.htm〕；方廣錩著[1998B]「敦煌遺書中的≪妙法蓮華經≫及有關文獻」{方廣錩著[1998B]『敦煌學佛教學論叢』下(中國佛教文化研究所、香港、pp.65−103)；【修訂稿】方广锠稿[1998F]「敦煌遗书中的≪妙法莲华经≫及有关文献」(『法源』16)・〔http://www.zgfxy.cn/Article/ShowArticle.asp?ArticleID=46〕

方广锠，徐忆农稿[1998D]「南京图书馆所藏敦煌遗书目录」(『敦煌研究』1998−4、pp.134−143)

方廣錩稿，遠藤健訳[1997C]「敦煌遺書中の『法華経』注疏」(『中外日報』

1997-11-15、p.1, p.7)；方广锠稿[1998E]「敦煌遗书中的≪法华经≫注疏」(『世界宗教研究』1998-2、pp.75-79)

藤枝晃ほか[1959-1963]『スタイン収集文献分類目録解題初稿』(京都大學人文科學研究所)；京大人文科学敦煌研究班編『敦煌仏典解題』(前掲の註(4)参照)

藤枝晃編[1978]『高昌残影 出口常順蔵トルファン出土仏典断片図録』(法藏館、京都)

藤枝晃編著[2005]『トルファン出土仏典の研究 高昌残影釈録』(法藏館、京都)

松尾良樹訳[1992]「妙法蓮華経講経文·提婆達多品」{長尾雅人, 柳田聖山, 梶山雄一監修[1992]『大乗仏典 中国·日本篇 第10巻 敦煌I』(中央公論社、東京、pp.107-137)}

矢吹慶輝編[1917]『シュタイン氏蒐集燉煌地方出古寫佛典ロートグラフ解説目録』(宗教大学、巣鴨村)；矢吹慶輝稿[1917a]「シュタイン氏蒐集燉煌地方出古寫佛典ロートグラフ解説目錄」(『宗教研究』2-5、pp.169-185)·矢吹慶輝稿[1917b]「スタイン氏蒐集燉煌地方出古寫佛典ロートグラフ解説目錄(承前)」(『宗教研究』2-6、pp.185-196[pp.194-195])·矢吹慶輝稿[1918]「スタイン氏蒐集燉煌地方出古寫佛典ロートグラフ解説目錄(完結)」(『宗教研究』2-8、pp.153-172)

矢吹慶輝編[1924]『英國博物館所藏スタイン寫本寫眞帖』(啓明会事務所、東京)

矢吹慶輝編[1925]『英國博物館藏燉煌出土古寫佛典ロートグラフ略目』(啓明会事務所、東京)

矢吹慶輝編著[1930]『鳴沙餘韻 燉煌出土未傳古逸佛典開寶』(岩波書店、東京)

矢吹慶輝選, 啓明會補助[1931]『大英博物館所藏オーレル·スタイン蒐集燉煌出土未傳古逸稀覯佛典白寫眞目録』(大正大學、東京)

矢吹慶輝著[1932]『燉煌出土古寫佛典に就いて』(岩波書店、東京)
矢吹慶輝編著[1933]『鳴沙餘韻解説　燉煌出土未傳古逸佛典開寶』(岩波書店、東京)
矢吹慶輝稿[1960]「敦煌文書の意義」(『大正新脩大藏經會員通信』4、pp.1-2)
杨铭稿[1996]「重庆市博物馆藏敦煌吐鲁番写经目录」(『敦煌研究』1996-1、pp.121-124)
吉村誠，山口弘江訳註[2012]『続高僧伝I』[新国訳大蔵経　中国撰述部【史伝部】①-3](大蔵出版、東京)
季羡林，饶宗颐主编[2004]『敦煌吐鲁番研究』第8卷(中华书局、北京)
劉靜宜稿[2006]「敦煌本≪妙法蓮華經講經文≫探析　以Φ365〈藥王菩薩本事品〉為例」(『正修通識教育學報』2006-3、pp.293-317)
高山寺典籍文書綜合調査團編[1999]『高山寺本東域傳燈目録(高山寺資料叢書 第19冊)』(東京大學出版會、東京)
高楠順次郎編[1929-1934]『昭和法寶總目録』第2巻(大正新修大藏經刊行會、東京)
龍谷大學圖書館編[1936]『龍谷大學圖書館善本目録』(龍谷大學出版部、京都)
京都国立博物館[1954]『宸翰古經目錄　守屋コレクション』(京都国立博物館、京都)
磯部彰編[2005]『台東区立書道博物館所蔵中村不折旧蔵禹域墨書集成』3冊〔上：【001】～【064】、中：【065】～【151】、下：【152】～【228】〕(二玄社、東京)
無署名[1914]「敦煌發掘唐人書寫法華經玄贊第四卷」(『書苑』3-9)〔=書博【100】〕
武田科学振興財団杏雨書屋編[2009-2012]『敦煌秘笈』目録冊・影片冊①～

⑦(武田科学振興財団、大阪)
黄永武主編[1981-1986]『敦煌寶藏』全140冊(新文豐出版、臺北)
黄永武主編[1986]『敦煌遺書最新目録』(新文豐出版、臺北)
禪叡編著[1996]『敦煌寶藏遺書索引』(法鼓文化事業、台北)
商務印書館編[1962]『敦煌遺書總目索引』(中華書局、北京)
商務印書館編[2000]『敦煌遺書總目索引新編』(中華書局、北京)
金岡照光編 編集協力 河村孝照，柿市里子[1991]「敦煌文献目録 スタイン・ペリオ蒐集(漢文文献編)」(『東洋学研究』25、pp.1-305)
河村孝照，柿市里子編[1992]「敦煌文献目録 スタイン・ペリオ蒐集(漢文文献編索引上巻)」(『東洋学研究』28、pp.1-86)
柿市里子，玉野井純子編[1993]「敦煌文献目録 スタイン・ペリオ蒐集(漢文文献編索引下巻)」(『東洋学研究』29、pp.87-146)
孟列夫(Л.Н.緬希科夫)主編；M.И.沃羅比耶娃-捷霞托夫斯卡婭[ほか]編撰；袁席箴，陳華平翻譯[1999]『俄藏敦煌漢文寫卷叙録』下册(上海古籍出版社、上海)
国際仏教学大学院大学附属図書館[2006]『大正蔵・敦煌出土仏典対照目録 ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブルク支所フランス国立図書館所蔵仏典 第2版』(国際仏教学大学院大学附属図書館、東京)
中田篤郎編[1989]『北京圖書館藏敦煌遺書総目録』(朋友書店、京都)
饒宗頤主編，王素・李方著[1997]『魏晉南北朝敦煌文獻編年』(新文豐出版公司、臺北)
申國美編[2007]『中國散藏敦煌文獻分類目録』(北京圖書館出版社、北京)
申國美，李德範編[2009]『英藏法藏敦煌遺書研究按號索引』3冊 [(一)：[S.2]～[S.5637]、(二)：[S.5638]～[S.13880]・[S.T.5]～[S.T.796]・

[S.P.2]～[S.P.20]・[BM.S.P.05(Ch.xxxviii.005)]～[BM.S.P.260(Ch.00422)]・[P.2001]～[P.2927]、(三)：[P.2928]～[P.6039]・[P.T.1]～[P.T.6222]] (國家圖書館出版社、北京)

西脇常記著[2007]『イスタンブール大學圖書館所藏トルファン出土漢語斷片研究』(同志社大学文学部文化史学科西脇研究室、京都)

香川默識編[1915]『西域考古圖譜』上・下巻(國華社、東京)

旅順博物館，龍谷大学編著[2006]『旅順博物館蔵トルファン出土漢文仏典断片選影』(法藏館、京都)

季羨林主編[1998]『敦煌學大辭典』(上海辞書出版社、上海)

鎌田茂雄[ほか]編[1998]『大蔵経全解説大事典』(雄山閣出版、東京)

俄羅斯科學院東方研究所聖彼得堡分所，俄羅斯科學出版社東方文學部，上海古籍出版社編[1992-2001]『俄羅斯科學院東方研究所聖彼得堡分所藏敦煌文獻』①～⑰ [⑤：[Φ251]～[Φ366]、⑦：[Дx00601]～[Дx01184]、⑧：[Дx01185]～[Дx02000]] (上海古籍出版社、上海)

上海古籍出版社，上海博物館編[1993-]『上海博物館藏敦煌吐魯番文獻』①～④ [①：[01]～[47]、②：[48]～[80]・[附01]～[附11]] (上海古籍出版社、上海)

上海古籍出版社，法國國家圖書館編[1994-2005]『法國國家圖書館藏敦煌西域文獻』①～㉞(上海古籍出版社、上海)

上海古籍出版社，北京大學圖書館編[1995]『北京大學圖書館藏敦煌文獻』①～② [②：[D086]～[D246]・[ADDJ1]～[C64])』

上海古籍出版社，天津市藝術博物館編[1996-1998]『天津市藝術博物館藏敦煌文獻』①～⑦ [⑤：[229]～[261]、⑥：[262]～[306]] (上海古籍出版社、上海)

上海古籍出版社，上海圖書館編[1999-]『上海圖書館藏敦煌吐魯番文獻』

①~④ [④ : [156]~[187] · [附1]~[附9]] (上海古籍出版社、上海)

甘肅藏敦煌文獻編委會, 甘肅人民出版社, 甘肅省文物局編[1999]『敦煌市博物館藏敦煌文獻, 定西縣博物館藏敦煌文獻, 高台縣博物館藏敦煌文獻』第六卷(甘肅人民出版社、蘭州)

≪中國書店藏敦煌文獻≫編輯委員會編撰[2007]『中國書店藏敦煌文獻』(中國書店、北京)

Bibliothèque nationale de France[1970] *Catalogue des Manuscrits chinois de Touen-Houang: Fonds Pelliot chinois*, VOLUME I N°s 2001-2500, Bibliothèque nationale, Paris. · 〔http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/ bpt6k213897p〕

Bibliothèque nationale de France[1983] *Catalogue des Manuscrits chinois de Touen-Houang: Fonds Pelliot chinois de la Bibliothèque nationale*, VOLUME III N°s 3001-3500, Bibliothèque nationale, Paris. · 〔http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k2138982〕

Bibliothèque nationale de France[1991] *Catalogue des Manuscrits chinois de Touen-Houang: Fonds Pelliot chinois de la Bibliothèque nationale*, VOLUME IV N°s 3501-4000, Bibliothèque nationale, Paris. · 〔http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k213899f〕

Bibliothèque nationale de France[1995] *Catalogue des Manuscrits chinois de Touen-Houang: Fonds Pelliot chinois de la Bibliothèque nationale*, VOLUME V N°s 4001-6040, Avec le concours de la Fondation Singer-Polignac, TOME 1 4001-4734, Bibliothèque nationale, Paris. · 〔http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k2139007〕

Gerhanrd Schmitt, Thomas Thilo[1975] *Katalog Chinesischer Buddhistischer Textfragmente Band 1: Schriften zur Geschichte und Kultur des Alten Orients*, Berliner Turfantexte VI.

Gerhanrd Schmitt, Thomas Thilo[1985]*Katalog Chinesischer Buddhistischer Textfragmente Band 2: Schriften zur Geschichte und Kultur des Alten Orients*, Berliner Turfantexte XIV.

Lionel Giles[1957]*Descriptive catalogue of the Chinese manuscripts from Tunhuang in the British Museum*, Trustees of the British Museum, London.

Abstract

A basic study on Commentaries on the *Lotus Sutra* Excavated from the Western Regions

Kim, Byung-kon

Project Assistant Professor, Minobusan university

and Part-time Lecturer, Rissho university

The five kinds (Nos. 2748-2752) and the six manuscripts (S. 2733, S .4102, S. 4107, S. 2463, S. 2439, S. 2662) of commentaries on the *Lotus Sutra* excavated from the Western Regions (Dunhuang) are contained in Koitsu-bu, vol.85 of the *Taishō Tripiṭaka*.

This paper reviews existing studies concerning commentaries on the *Lotus Sutra* from the Western Regions. It will also analyze the relationship between these commentaries and the *Miaofalianhuajing Zuanshu* 妙法蓮華經纘述 written by Huijing 慧淨 (578-645?) in the Jiguo si 紀國寺, which was discovered by the author in 2010.

These have relevance to other manuscripts as follows:

I. S. 2733. & S. 4102. cf. BD06199 (淡32).

II. S. 4107. cf. BD06198 (菜11).

III. S. 2463. cf. BD06199 (淡32), S. 113v.

IV. S. 2439. cf. BD06196 (暑70), P. ch. 4567, BD06197 (玉26), P. ch. 3308.

V. S. 2662.

This paper makes it clear that II and V are strongly connected to the *Zuanshu*.

There are three kinds of original text of the *Zuanshu*:

1) Korean Treasure No. 206. (chap. 1)

2) Korean Treasure No. 1468-4. (chaps. 3-6)

3) BD06202 (致15). (chap. 1)

There are two kinds of excerpts which can be extracted from the *Zuanshu*:

1) S. 6494. (chaps. 1-3)

2) S. 4107. (chaps. 16-20)

The *Zuanshu*, an influential document inspired the commentaries on the *Lotus Sutra*, which were established after the seventh century.

Key Words: Koitsu-bu; Huijing; Qifu; *Miaofalianhuajing Zuanshu*; *Fahua yiji*; One sutra of four parts

2013년 6월 6일 투고
2013년 6월 21일 심사완료
2013년 6월 24일 게재확정